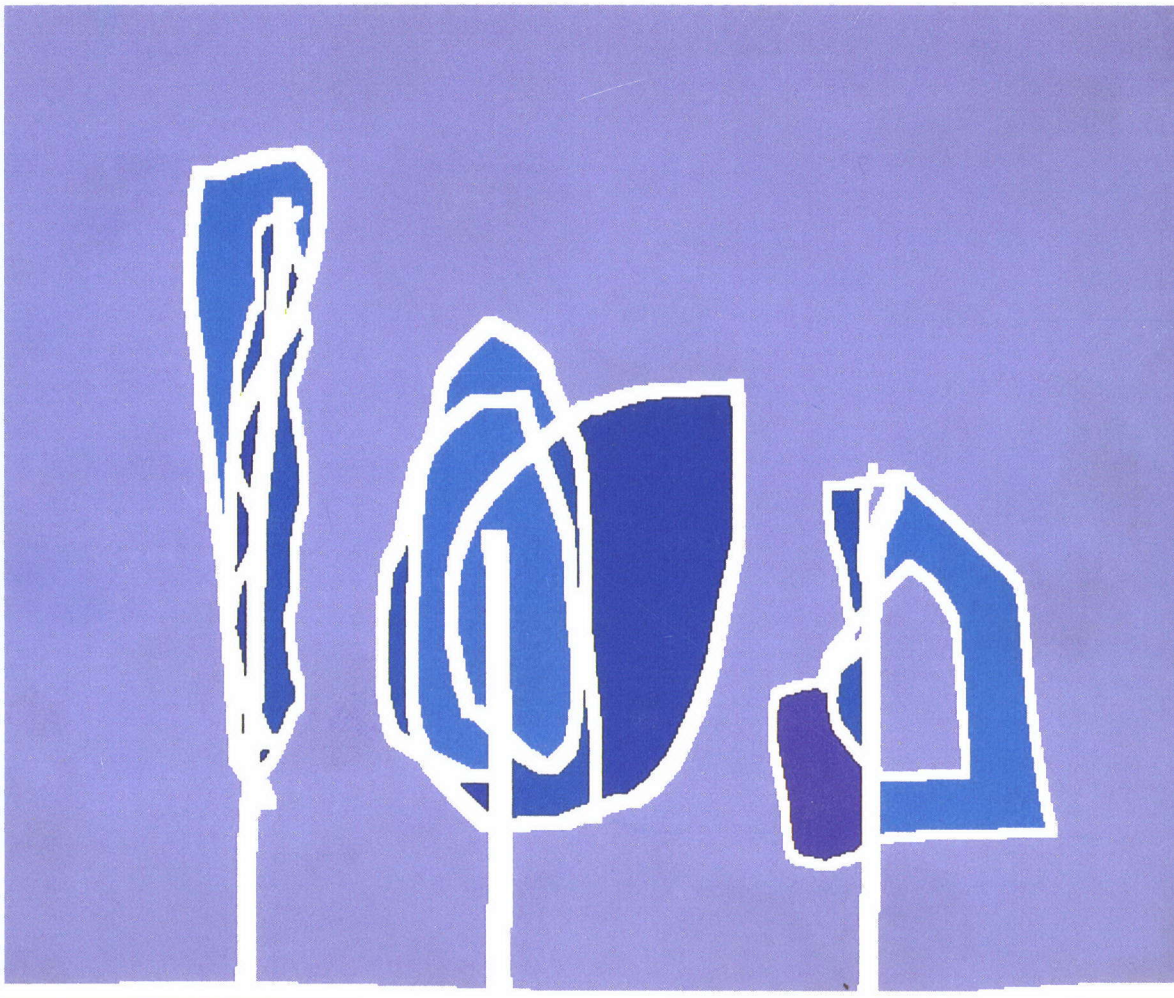
家族とくらし



◉特集／子育てをささえる

17号

家族とくらし　17号　もくじ

photo　杉原　志保　2

こんな働き方応援したい
農と食について子どもとともに考える　徳勝　宏子　4
北松いのちの農場の林由美子さん

NGO活動レポート　一歩ずつ進める国際交流　宮崎　久実　12

ある戦争孤児の歩み
ひとり生かされて・そして今　中島　弘子　22

特集:子育てをささえる

❶小さな子をおとなのものさしではからないで　広岡　守穂　28

❷海を越えて日本で子育て　岸　薫　35

❸子育てフリースペースっていいね　石田　敦子　41

うたの手帖17　木村　郁子　45

介護の現場～様々な光景から　櫻井　宏子　46

そんなつもりじゃなかったんです 17　加納 かがり　50
「馬鹿」五回はＮＧか否か

医療の現場から　徒然日記　小谷　和彦　55

常住坐臥8　広岡　守穂　58

地方政治を考える
～人権擁護委員の役割～　広岡　立美　64

『出前講座』やってみませんか　川崎　毅　69

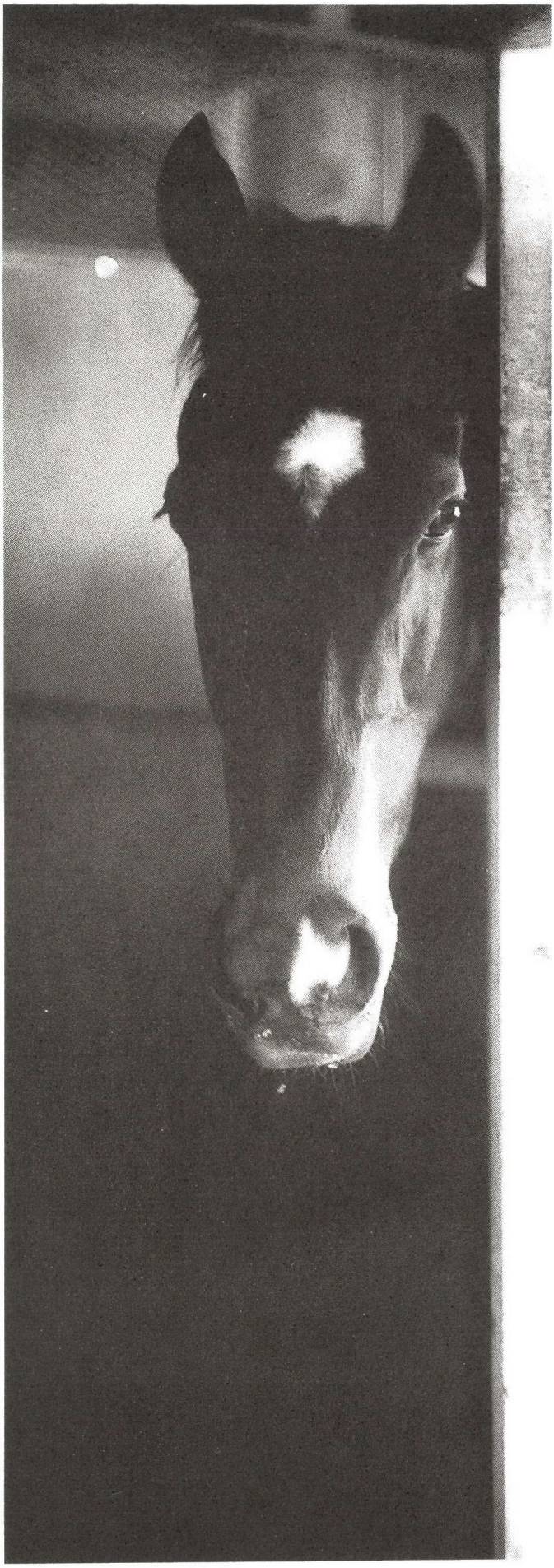
エッセイ

百人一首　平和町児童館の毎日　大野木 潤子　74

ゆらゆらと心に残る　堀川 美紀子　76

ステキは無敵　絹谷　智帆　78

編集後記　80



VOL. 17

華やかに活躍するその裏側で、引退して必要とされなくなった競争馬が、虐待を受けている実態があるという。馬の余生を引きうけるという名目で引き取られた引退競走馬たちが、糞尿の後始末もなされないコンクリートの厩舎で満足に餌も与えられず放置されていたり、はたまた動物園の動物の餌にされていたり。これらは、競走馬の世界のもうひとつの現実でもある。

その馬たちを救うべく、有志の人たちと協力して引き取り、里親を探す手助けをしているのが、加藤さんである。

彼女は「経済動物」というコトバだけに還元されない「馬の尊厳」と真っ向から向き合う。そのまなざしに「動物−人間」といった垣根はない。

という以前に、そもそも人間と動物の間にそのような垣根なんかないはずなのであって。

経済を追求していく中で、動物を人間というカテゴリーから引き離し、一部の動物を経済媒体としてきた、その果ての結末。それらを省みる先におのずと見えてくる、引退馬の余生を保障するということ。それらと向き合わない限り、私たちは現代をさまようピエロのままかもしれない。

加藤朝子
【「競走馬を生かそう会」本部代表】
http://homepage1.nifty.com/alive-network/

写真/文　杉原志保

こんな働き方応援したい

農と食について子どもとともに考える

北松いのちの農場 の林由美子さん

徳勝 宏子

北松いのちの農場

長崎県佐世保市から車で1時間弱。深い雑木林があちこちに残る自然豊かな山あいの地に「北松いのちの農場」がスタートして1年半が過ぎた。

「北松いのちの農場」は、この地で無農薬・有機農業を営んでいる林三生さん・由美子さん夫妻を中心に、食と農について考える場を作っていこうと有志が集まって運営しているもので、毎年ひとつの作物をテーマに月一度の体験学習を行っている。

大人だけの学びの場でもない。また、子どもだけの体験の場でもない。現在参加しているのは、よちよち歩きの子どもから、定年間近の夫婦まで、シングルも含め様々な家族20組。

わが家も子どもたちに土に触れる機会を作りたいと2年続けて参加しているが、今年のテーマは「米」。最初は田んぼのぬかるみを気持ち悪がっていた子どもたちも、最近はすっかり泥の感触を楽しんでいるようだ。

苗から育てた稲が実をつけるのは10月。今は炎天下の除草作業が大変な時期だが、収穫の日を楽しみに皆、汗まみれになってがんばっている。

肥料屋から百姓への転身

「野菜を作りながら体験学習をやるのは大変だけど、そこから得られるものはとても大きい。参加している皆さんからずいぶん元気をいただいてます」

そう語るのは「北松いのちの農場」の農場主であり、この事業を先頭で引っ張っている林由美子さん。

私が由美子さんと初めて会ったのは、今から4年前。夫妻がそれまでの仕事に区切りをつけ、現在の農場で百姓として第2の人生をスタートさせたばかりの頃だった。

由美子さんは北海道育ち。津別町という阿寒湖から車で90分ほどの小さな町に暮らし、いつも山で遊んでいる男勝りの女の子だったという。

九州男児である三生さんとの出会いは互いにまだ学生の頃で、知床のキャンプ場に遊びに来ていたところで偶然一緒になった。それから7年という時間を経て結婚。はるばる九州へ来ることとなる。

結婚当初、三生さんは商社勤めで転勤続き。肥料会社に転職して大村市に落ち着くまで7回転居している。2人の子どもの子育てに追われる中、最初の転機が訪れるのが31歳の時。三生さんが勤める肥料会社が有機肥料を作って販売することになり、由美子さんもお店を一軒まかされた。肥料に関してはもちろん素人。営業の経験もなかったが、いったんやると決めたら突き進む人。まずは園芸高校に通って肥料のことを勉強しながら、売れないことを承知で周囲の農家に通いつめた。

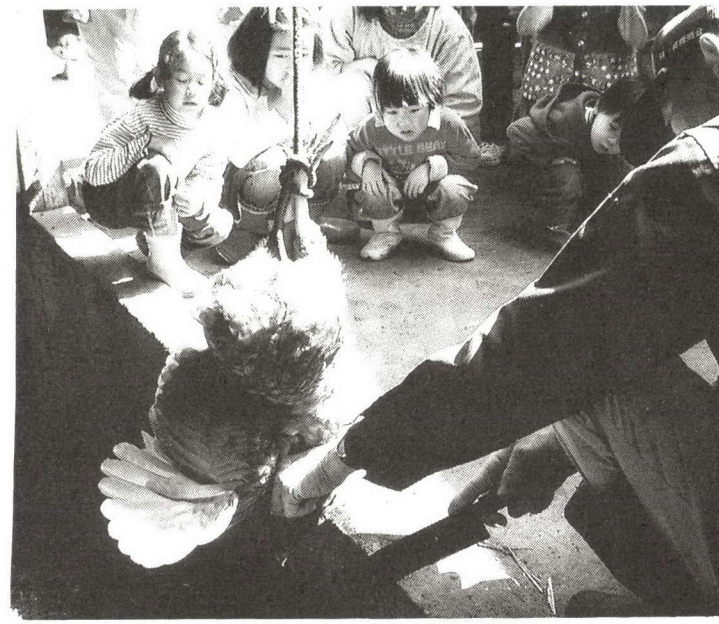
女性の肥料屋は珍しく、

わあー、じゃがいも だ

随分苦労もあったらしい。「肥料が悪くて作物ができなかった」と代金を踏み倒されたり、集金先で絡まれたり。持ち前の明るさと行動力で少しずつ販路を拡大していったものの、一方で「おかしい」と思うことがたくさんあった。

農薬はすごく使うし、化学肥料もどんどん使う。今の日本の農業って一体何なんだろう?そんな疑問が大きく胸の中に膨れあがった。

「お味噌を自分のところで作っていて『もっていかんね』と言われたり、山菜を上手に使ってお料理したり…。そんな農家の暮らしがすごく豊かに思えました。だけど、現実には化学肥料や農薬を使って作物を作ってる。これをもっと自然な形でできるよう私にもお手伝いできることはないかと、



鶏の解体ってすごいね

仕事にどんどんのめりこんでいきました」

そうしているうち、いつの間にか夫婦2人とも百姓になることを考えていた。

三生さんは会社勤めをしながら近くの畑を耕し、鶏を飼うようになって、テイクオフの準備は少しずつ整えられていたという。百姓は体力がいる。新しいことに取り組むには気力も必要だ。なんとか50代になる前に新たなスタートを切りたいと、県内のいろんな場所を見て歩いて、新天地に決めたのが北松浦郡江迎町にある今の農場だ。

「このあたりは自然が手つかずのまま残っていて、水もきれい。自然を活かした農業をやりたいと思っていた私達にとっては魅力的な土地だったんです」

かつて山の斜面を利用して畜産業が盛んだったが、安い輸入肉に押されてほとんどの業者が廃業。周りに

は耕し手がなく、草ぼうぼうの田畑も少なくない。

県内でもっとも保守性が強く、有機農業に対する理解はまだまだというこの町で、平成9年林さん夫婦は百姓としての第一歩を踏み出した。

健康を支える「ホームファーマー」をめざして

林さんが目指しているのは、食の視点から家族の健康を支える「ホームドクター」ならぬ「ホームファーマー」。点在する畑を合わせると約2万平方㍍（6千坪）以上の広さを耕す。野菜と卵の宅配便を届けているが、その家庭の料理はなるだけ宅配野菜だけで賄えるようにしたいというこだわりから、年間約50種類の野菜をたった2人で作り続けている。

一言で「年間約50種類」というが、これは実は大変なことなのだ。毎週の宅配便に入る野菜は8～10種類（ちなみに今週はモロヘイヤ、きゅうり、なす、たまねぎ、じゃがいも、小松菜、しその葉、みょうが、おくら、ゴーヤ、有精卵。これで2千円）。それだけの種類が常に消費者に届くように、ある畑では作付けし、ある畑では育ちつつある作物が虫にやられないように環境を整え、同時に別の畑では収穫もする。

「広い畑に出て一度出ていったら、その先々で仕事が待ってて帰ってこれないのよ」と由美子さんは笑う。

ここのところ、いのししの害に悩まされ、人の臭いがつくようにと美容院からもらってきた髪を畑にまいた。農薬のかかっていないおいしい野菜を動物が好むのも当然の話で害敵は多いし、天候に泣かされることもしばしばだ。おまけに最近の異常気象で先の見通しがたちにくくなっている。

「これまでは4年周期で気候が変わってきていて、4年日記をつけておけば大体の先の見通しがついた。けれど、最近は一年一年違っていて、昔の記録が役に立たないんですよ。自然農法にはますます難しい時代になりましたね」

野菜がとれない時には自家製の味噌やつけもの、山菜の塩漬けなどで欠品を補うが、それでも「量が少ない」「値段が高い」と苦情がでる。特に夏場は出来合いのもので済ませる家庭が多くなるのか「しばらくお休みさせて」という人が多いという。20件の休配はその

ま20％の収入減。農地購入の際のローンの支払いが月々かかるとなれば、それは大きな痛手となる。林さんの悪戦苦闘ぶりを身近に見ていると、食と農を見直そうという運動には、市場原理を超えて生産者と消費者が結び合える関係をつくることがいかに大切か、しみじみと実感する。

「いのちの農場」をつくろう

そんな忙しい生活の中、由美子さんの胸の中で大きくなっていったのが、子どもたちの農業体験学習構想。やはり次の時代をになう子どもたちに土とか、いのちとかいうものに直に触れ感じる場が必要だと切に感じるようになった。

実は林さん夫婦は、毎年夏休みに隣町で実施されている子どもの体験学習事業に協力して、ホストファミリーとして子どもたちを数日間受け入れている。その間農作業の手伝いをしたり、鶏の解体をしたり、山に水くみにいったり、子どもたちは様々な体験をする。それは楽しい時間であるが、由美子さんの中には「これではダメだ」という思いがずっとあった。なぜなら、その体験は子どもたちにとっては貴重なものではあるが、家に帰ると忘れ去られる一過性のもの。夏休みのいい思い出でしかない。

「もっと、この体験が日頃の生活に生かせるものにしたい。そのためには家族で体験してもらいたい。何より大人が変わらなくては?」。

そういう思いを周りに語り続けているうちに、賛同する人たちが集まり、まずはできる人がやれることからやっていこうということになった。皆から後押しされる形で、由美子さんも一大決心。こうして「食と農を子どもたちとともに体験し考えていくスペース～北松いのちの農場」は、一昨年(平成12年)の春、パタパタとスタートすることとなったのである。

体験学習から得られるもの

「北松いのちの農場」1年目のテーマは「大豆」。5月の土づくりから始まり、種まき、草むしり、土寄せ、枝マメの収穫、続いて大豆の収穫。その大豆を使って後半は豆腐、味噌、きな粉などの加工品作り。その間にビール作りやソーセージ作り、草木染めなどのお楽しみも入って、年間11回、毎月第4日曜日に集っては

いろんな「手作り」に挑戦した。

初年度の参加者は15家族およそ40人。「子どもに自然に触れて欲しくて」「いつか農業をやりたい。その時のための勉強に」「忙しい毎日の中、リフレッシュしたくて」。参加の理由は様々だ。親子連れが多いが、子どもより親の方がはまってしまって、子どもそっちのけで楽しんでいるところも…。50代のご夫婦やはるばる長崎から通った独身女性もいて、1年が過ぎるころには大家族のような雰囲気になった。

みんなでたねを蒔きました

6月の種まきの時、こんなことがあった。林さんから種子用の種が配られると、30代の女性が一言「えー、大豆が種なんですか？」。彼女はその時はじめて自分がいつも口にしている大豆が、大豆の種子でもあることに気がついたのだった。大豆の種子はかたくて、一見死んでいるようだが、土の中で適度の水分と温度に出会うと発芽して生きはじめる。そのエネルギーを小さな身体に貯えている大豆。「栄養がいっぱいだから、おマメを食べなさい」というのはそういうわけなのだ。

私が一番印象に残っているのは豆腐つくり。あの固い大豆から白いふわふわのお豆腐ができる過程はまさにマジック。できたてのおぼろ豆腐のおいしさは忘れられない。なんせ、大豆からの手作り。きな粉にしても、味噌にしても実際に手作りしてみると、私たちが口にしている食べ物は先人たちの知恵の集結であることがよくわかった。そのことをかみしめながら、作り

今日は はかどりそう

その子その子で関わり方も感じたことも様々。小学1年生だったわが息子は、親の意に反して畑仕事には興味をもたず、30分も続かない。あとは水路でパシャパシャ水遊びをしたり、空いた畑でかけっこをするのが常。畑への行帰り、トラックの荷台に乗るのが楽しみだったようだ。

2年目を迎えた去年のテーマは「米」。大豆にくらべると変化に乏しく、通年のテーマとしては難しいのではないかという意見もあったが、「ぜひ、やりたい」と言い続けたのは由美子さんだった。

「米はやっぱり日本人の心。梅雨のある日本は、米を作ることで水を調整し、水害を守り、その恵みで米を作り生活を守ってきました。これを機会になぜ日本人にとって米が大切で、水が大切で、自然が大切で、それによって私たちの健康が守られ日本人としての心まで守られてきたか考えてほしいんです」。

子どもたちはというと、食べる。そういうことをいかに私たちが忘れてきたか、考えさせられた一年でもあった。

夢を形に

今、由美子さんには2つの夢がある。

ひとつは体験学習を幅広いものにするために自宅横の鶏舎を利用して宿泊施設を作ることだ。体験学習には室内での作業もある。これまでは林さんの自宅を利用してきたが、すでに手狭になってきている。宿泊施設があれば、泊まり掛けで農場に来て、もっとゆっくり畑とつきあえるし、ともに語り合う場がほしいと参加者から要望も多い。

仕事の疲れをとりにくるのもいい。手軽な家族旅行

に利用してもらうのもいいだろう。せっかく作るならば厨房も広く、旬の野菜をつかった料理教室も開きたい。料理上手のスタッフを集めて、週末レストランを開く、なんていう楽しい提案もある。泊まり客に食事を出す余裕はないから、とりあえず厨房を自由に使ってとれたての野菜で自炊することが原則だ。

これを「むすびの家」と名付けて、今その夢の実現に向かって可能性を模索している。問題は資金づくり。助成金を申請したり、賛助金を募ったり、資金調達の道を探りながら、いざとなれば数年越し、有志で手作りするのも「いのちの農場」らしいなと考えているところだ。

もうひとつの夢は「北松いのちの農場」をNPO法人にすること。林さん個人の運営ではなく、みんなで作る農場にしたいというのが林さんの願いだ。荒れた畑が耕され、週末になればそこに多くの人が集い楽しそうな声が聞こえてくる。

「北松いのちの農場」は今、後継者不足で沈んでいるこの地域の中で、新しい動きとして注目を集めつつある。林さんたちが生き返らせた畑を、また次の世代に引き継ぎ、緑を守るために、多くの人が参画できるシステムにすることが大事、由美子さんはそう考えている。

これを実現するためのハードルは高い。まずは人材不足。一番近い都市、佐世保から1時間という距離も災いしている。しかし、「農業をやりたくて」と林家を訪ねてくる就農希望者は毎年多くなっているし、最近は学校関係者からの問い合わせが増えてきているという。

「ヨーロッパではファーミングスクールといって、学校の中で農業を学ぶシステムがしっかりと根付いています。日本の子どもたちも、食や環境のことも含めて体験学習していく機会を作っていくことが大事。そして登校拒否や引きこもりの子どもたちの居場所にもなれば嬉しいですね。」

時代は少しずつ動いている。由美子さんはそう感じている。

スタートして1年半。「北松いのちの農場」は播かれた種から芽が出たばかりだ。農場に集ってくる人たちの知恵とパワーを水と栄養にしながら、この芽が大きく伸びて、確かな実を結ぶことを切に願っている。

（とくかつ ひろこ）

NGO活動レポート

一歩ずつ進める国際交流

小林奈穂子さんの場合

宮崎 久実

第一章 最初の一歩

1 インドで井戸掘り

NGO活動をしている女性。そう紹介されて、小林菜穂子さんに会いに行った。インドに井戸掘り行って、その後インドに留学し、今は長野県松本市で暮らしている。チエルノブイリの子どもたちや、タイのHIVホスピスの支援活動にかかわっているという。どんなバリバリの女性が現れるかと思っていたら、柔らかい声の暖かい雰囲気の女性だった。

菜穂子さんの最初の一歩は、大学生のときインドへ井戸掘りに行ったことである。NGO「アジア協会アジア友の会東京事務所」(当時)の海外協力プロジェクトのワーク・キャンプだった。参加者は男女20数人、そこで10代から60代までの職業もさまざまな人たちと知り合った。

井戸掘りを1週間した後、2週間それぞれにインド国内をあちこち回った。そのワーク・キャンプを選んだのは、「旅行ではないインドで「生活できる」ことが魅力だったからだ。菜穂子さんにとって村の生活は、優しさや音楽を暮らしの中にもつ心豊かなものであり、「その人たちと過ごす時間が楽しかった」。

現地で友だちもできた。なかでも、イマニーさんという女性と仲良くなった。でも、その中で垣間見る貧しさに、日本に帰ってから「私の知っている彼や彼女」の抱えている問題が気になりだした。

2　NGOが活躍するインドという国

インドにおける貧困の問題は深刻である。インドの農村部では現代でも、慢性的な水不足が続いている。そのため唯一の収入源である農作物が充分に育たない。不衛生な水による病気や死がある。日常の水汲みは女性や子どもの労働とされている。さらに農村部でも工業化が進み、化学工場の排水が原因で地下水が汚染される村も増加しているという。

開発途上国の貧困の解決には、地域社会の環境、安定した収入源の確保、生活の安全の保障、衛生・保健の整備、医療の充実、女性の地位の向上、子どもの教育の確保などが複合的に関わっている。その解決には、そこに暮らす地域住民のエンパワーメントが必要である。さらに、開発は持続可能であることが要求される。それは、物質の支援型ではなく、地域住民との話し合いや協力によってはじめて可能となる。

3　翌年もまたインドへ

菜穂子さんが、「井戸掘り」の小さな募集を新聞で見つけたのは大学1年生のときだった。当時、福島の大学にいたが、主催するNGOの事務所があるのは東京だった。それでも菜穂子さんは、情報を収集し準備を始めた。連絡をとり、資料を取り寄せ、東京まで説明会に出かけ、これまでの参加者の体験集を読んだ。そして、2年生の春休みにインドへ行った。

協力費込みの参加費約29万円（当時）はアルバイトで貯めた。その後も、旅行や留学に備えていろいろなアルバイトをした。

菜穂子さんを「インドで井戸掘り」に踏み込ませたのは、何だったのだろうか。文字や画面だけではなく、「自分の目で見て感じたい」という気持ちがあった。だから、

踏み出すための最後の一押しという意識は特にない。気になったことや、知りたいこと、すごく惹かれること、そうしたことが菜穂子さんの中で繋がってきたのだという。

参加したワーク・キャンプの井戸を掘る期間は1週間であった。実際、井戸を掘り当てるまでに6ヶ月かかることもあるし、それだけ掘っても水が出てこないこともあるという。

「井戸掘り」を通して、「NGOの仕事は現地の人に役立っているのか?」が気になり始めた。イマニーさんに会いたかった。自分の掘った井戸を見たかった。「インドのことをもっと知りたい」、「何かできないか?」、「でも、ホントに何ができるのか?」

そして答えのないまま、菜穂子さんは、次の年にまたインドへ行く。

第二章　「この人のいる場所でやりたい」

1　ザカリアさんとの出会い

菜穂子さんは、初めて行ったインドで、NGOであるISSA（Indian Society for Social Action）を設立・運営しているザカリア（John Zechariah）さんと出会った。

ザカリアさんはスパイサー・メモリアル大学経済学部の労働問題を専門とする教授である。地域の支援活動のためにとISSAを設立した。設立当初の活動は私費による奨学金制度であった。

1990年、ザカリアさんは、日本学術振興会の援助で同志社大学客員研究員として初めて日本にやって来た。そのとき「アジア協会アジア友の会」と出会った。それから、お互いをカウンターパートとして「インドに水を」の活動を始めた。

その後、ザカリアさんの活動は、水・食糧・教育・小学校建設と広がっていく。菜穂子さんが出会ったのはそんなときであった。

2　キーパーソンをスーパーバイザーに

「この人のいる場所でやりたい」。ザカリアさんと出会って菜穂子さんはそう思ったという。彼

女にとってザカリアさんは人生のキーパーソンのひとりである。

私が惹かれたのは、「ごく普通の人」が、キーパーソンをスーパーバイザーとし、そして成長していく姿だ。だから、「普通のひと」「これからの人」であるといえる菜穂子さんが私は気になってしかたなかった。「ふつうの女性」たちが何かに気づいて、ともかく動き始める。その行動は、個人から家族、地域社会、行政、国、国際社会へと繋がり広がる可能性を持っている。

右から２番目が奈穂子さん

菜穂子さんは、大学を卒業した後、プーナ大学(Poona University)の大学院でソーシャルワーク（MSW/Master of Social Work,社会福祉事業）を学ぶため単身インドへ渡った。

3　インドでのフィールド・ワーク

プーナ大学の大学院は、フィールド・ワークを重視し、人間同士の一対一の関係を大切にするという教育を行っていた。言葉は英語とマラティー語だった。菜穂子さんは週に二日カリキュラムの一環としてＮＧＯで働き、四日は大学院で理論を学んだ。

具体的には、知的障害児通所施設に通ったり、児童養護施設に宿泊したりしてフィールド・ワークを行った。知的障害児通所施設には一年間通った。そこの人たちと一緒に同じ仕事をするかたわら、自分自身でプログラムをたて実施した。また、スラムの保育園に通う子どもたちの母親や近くに住む女性たちと共に生活改善プログラムに取り組

んだ。また、その大学院から派遣されて、有名な日本のＮＧＯであるシャプラニールに一ヶ月間研修に行ったこともある。

ソーシャルワークをしながら、コミュニティ・デベロップメント、農村、スラム、子ども、ジェンダーなど、たくさんの問題が具体的に見えてきた。そして、その解決のためのアプローチの方法がいくつもあることに気がついたとき、「さらに専門を絞らなければ」と思ったという。そのとき一番つよく惹かれたのは「子ども」だった。

２年後、日本に帰り、ＯＤＡ関係の国際開発コンサルタント会社の契約社員となった。でも、働いているうちに、だんだん「自分とペースが違う気がして、ＯＤＡが合わないのでは・・・」という気持ちが大きくなってきた。そして、「自分がやるんだったら何を？」と考えるようになった。

第三章　ＮＧＯで働く

１　保育を大学の通信教育で学びたい

インドでフィールド・ワークをしていたときの「子どもにかかわる仕事がしたい」という思いが強くなってきた。そして、幼稚園教諭資格、保育士資格の取得が可能な大学の通信教育で学ぶことを考え始めた。

ちょうどその頃、「日本チェルノブイリ連帯基金」（ＪＣＦ）というＮＧＯのことを知り、何度か足を運んだ。

一方、ＯＤＡ関係の職場でも、正社員にならないかと言われていた。正社員になると保育の勉強をする時間を取りづらくなるし、海外に出ることができなくなる。

ちなみに、大学の通信教育とは、通常、高卒か大検で入学することができる。大学とほぼ同じカリキュラムで勉強ができ、学びたい人たちのための制度である。レポート作成が中心となるが、教室で先生から直接に講義を受ける授業「スクーリング」の受講も必要だ。スクーリングに行くには何日かのお休みが必要であるため、仕事先に理解があるかどうかは通教生にとっては重要な問題である。

迷ったが、結局、スク

ーリングの参加もＯＫということで、１９９７年４月に日本チェルノブイリ連帯基金に勤務した。

その年の９月から、浪速短期大学（現大阪芸術大学短期大学部）の通信教育部に入学して保育の勉強を始める。

２　高橋卓志さんとの出会い

勉強をしたいと言う菜穂子さんを応援してくれたのは、日本チェルノブイリ連帯基金を設立した高橋卓志さんと、そのつれあいの正子さんである。菜穂子さんは、高橋さんの行動力、考えること、やっていること、目指していることが気になり、いつのまにか引き込まれていたという。学生時代に勉強したロシア語も役に立つこととなる。

「日本チェルノブイリ連帯基金」は、チェルノブイリ原子力発電所事故被災者への医療支援を目的としたＮＧＯである。ベラルーシに医療専門家を派遣し、現地の専門家と共同して医療支援活動と調査を展開している。子どもたちの甲状腺癌調査やスタディ・ツアーなども行っている。

高橋さんは、長野県ＮＰＯセンターの代表だ。永六輔さんを校長とした尋常浅間学校を主催している。タイのＨＩＶホスピスを支援する「アクセス・21」というＮＧＯも運営し、ターミナル・ケアについての本を出しているという。

高橋さんとはどんな人なのだろうと思い、尋常浅間学校の「授業」である、小室等さんと谷川俊太郎さんのコンサートに合わせて、高橋さんに会いに行ってきた。

３　人が生まれた場所

ジャーナリスト志望だったという高橋さんが生まれた場所はお寺だった。高橋さんはお坊さんでもある。高橋さんは、松本市にある臨済宗の神宮寺というお寺を拠点に活動していた。そこで子ども図書館を開き、デイ・サービスをしている。また、宗派を問わない永代供養の「夢幻塔」をもつ。また、高橋さんはリビング・ウィル（生者の意志）を尊重することから、生前契約・没後決済を行う、ＮＰＯ法人

ライフデザインセンターを設立している。

神宮寺の本堂には、丸木俊・位里夫妻の描いた襖絵がある。毎年夏には、丸木美術館から借りてくる『原爆の図』が無料で公開されるという。お寺には古くからの決まりごとも多い。そのなかで、多岐に渡る高橋さんの活動は、ひとり一人の、ひとつ一つの心の悩みに正面から向き合った結果なのだと思われた。

私は結局、大盛況だった「授業」の打ち上げ会に混ぜていただいた上、お寺に泊めていただいた。菜穂子さんや尋常浅間学校の担当美佐子さんと女3人で語り合い、毎朝五時に撞くお寺の清々しい鐘の音を聞いてから床に入った。

高橋さんはみんなから「じんさん」と慕われている。いろいろ人たちが集まってきていた。そこは、とても心地よい場だった。人と人はつながっている。ひとを大切にする心は、周りを幸せにするのだと思った。

第四章　タイのホスピスでの出会い

1　「アクセス・21」

菜穂子さんは、1999年3月、日本チェルノブイリ連帯基金に2年間勤めた後、退職をした。「仕切りなおし」だった。大学の通信教育を卒業しようと勉強を中心にやっていたが、高橋さんから、「アクセス・21の事務局をやってくれないか」と声を掛けられ、その年の9月から結局引きうけることになった。

アクセス・21は、「21世紀の諸問題にアクセス（接近）し、その問題解決に向けて行動しようとするNGO」である。その設立のきっかけは、高橋さんとタイのお寺（プラバートナンプー寺Wat Phabat namphu）でエイズホスピスをするアロンコット師との出会いからだった。

人口約6千万人のタイでのHIV／エイズ感染者・患者は120万人を超えると推定されている。そのうち、北部タイの感染者数は、タイ全土の40％を占める。

なぜ、それほどエイズ感染者が多いのだろうか。原因の多くは公娼制度に近い売春にあるといわれ

る。女性感染者の多くは、配偶者からの二次感染である。また、感染後の出産によって子どもへの感染につながることも多い。女性たちは、エイズによる夫の死を見送り、自分自身の病気と、子どもが将来孤児になることを予期しているという。

2　タイのホスピスで出会った男性

タイのＨＩＶホスピスで、菜穂子さんは一人の男性と出会った。その男性は、自分の死を受け入れていたという。それまでは、死に対する恐れが強かったが、その男性と出会ったことをきっかけに、改めて「ターミナル・ケア」を考えるようになった。

アクセス・21は、お寺とは別会計で寄付集めも仕事だった。また、タイに1週間くらい滞在しながら調査をし、現地スタッフやカウンター・パートの現地ＮＧＯと話し合う。菜穂子さんも3〜4ヶ月に1回くらいタイへ行っていた。

何度も現地へ足を運ぶのは、いま本当に必要されていることに支援をするためである。現地のＮＧＯとのネットワークを作ることも大切なことである。

「私たちができることは何か」、アクセス・21の活動の中で、菜穂子さんは考えていた。「ひとり一人の人間を、マスのなかの一人ととらえるのではなく、ひとり一人とつながっていくこと、それは決して簡単なことではないと思うのですが、こういったことを大切にして活動をしていきたい」と考えている。

3　作務衣プロジェクト

その結果、アクセス・21では、いま、「作務衣プロジェクト」が動いている。タイの北部サンパトンで、ＨＩＶ感染した女性たちとその支援をする女性たちがいっしょに作務衣を作るである。

タイ人で現地ＮＧＯの指導的役割を果たしているソムヨットさんは、「エイズ感染者のみのために動かすプロジェクトではなく、エイズ感染者を含む地域全体の自立に役立つプロジェクトであるべきだ」という。菜穂子さんもソムヨットさんたち

現地のスタッフと一緒に働き、積み重ねていくことが大切だと考えている。

私もタイから届いた作務衣の荷解き作業を手伝わせてもらった。今回届いた5つの大きなダンボール箱には、作務衣が色もサイズもバラバラに入っていた。商品管理についての意識が違う。

正子さんは、作務衣を「商品」としてここまでするのに一年かかった。草木染めで手織りとはいえ織りにもまだムラがある。サイズが本体とシールで違うこともある。正子さんは、日常の仕事の合間を縫って黙々とチェックをし、時には商品の手直しをする。「品物、商品として良いものにしたい」という。

作務衣を買って着てみた。かかわっている人たちの心が伝わってくる。

第五章　これからの菜穂子さん

1　イギリスや北欧やアメリカのホスピスをまわる

菜穂子さんは、現在研修医であるつれあいと一緒に、何度かイギリスや北欧などの福祉施設、ホスピス、学校、幼稚園などを回っている。

ふたりの視察の方法はこうだ。自分たちで滞在のプログラムを組み、あらかじめ手紙、ＦＡＸ、メールなどで、直接連絡して交渉をする。一週間、施設の部屋を借りて滞在したこともある。

例えば１９９７年には、イギリス、北欧の障害者施設や福祉施設など20ヶ所を回り、２０００年には、イギリスの子どものホスピスやホスピスを約８ヶ所まわった。２００１年は、イギリスにおけるチベット人によるチベット支援ＮＰＯ、チベット・ファンデーションなどをまわった。なぜ、イギリスでチベットなのかというと、プーナ大学大学院にいたとき、インドのチベット人難民コミュニティへ行ったことがきっかけであるという。

また１９９９年秋、菜穂子さんは、「アクセス・21」の研修でカリフォルニア州サンフランシスコへ福祉系ＮＰＯの視察に参加した。長野県ＮＰＯセンターが企画し、ＪＰＲＮ（日本太平洋資料ネットワーク）がコーディ

ネートするマネジメント・セミナーだった。そこでも自分でコンタクトを取って、空き時間に地元のホスピスを回った。

2　「子ども」を通してかかわりたい

そんな菜穂子さんでも、最初に準備をしているときには、言葉の問題とか、知らない人に会うこととか、「あー大変だなあ」と思うことはあるという。でも、その後には、「いい出会いがあると思う」のである。「一歩ずつ進めていけたらなあ」と思っているという。

菜穂子さんは、背伸びをせずに、「身の丈でやれる、自分の手の届く範囲」でできることをやりたいと考えている。

いま菜穂子さんは大学の通信教育の教育実習の真っ最中である。保育園へ教育実習に行き、毎日そのレポートを提出している。これからは、直接子どもとかかわることをやっていきたいと考えている。

3　さいごに

菜穂子さんは気負いとか、使命感で目が曇らない人だと思った。そして、とかく話し合う。誰とでも、とことん話し合う。

取材していて気づいたのは、矛盾がないことだ。高橋さんは、菜穂子さんのことを「正確に情報を把握して、理解して、的確に発信する人だ」と言った。実際、菜穂子さんが語る菜穂子さんのこと、菜穂子さんが語る周りの人たちのこと、周りの人たちが語る菜穂子さんのこと、これらが吸い付くように一致しているのだ。

菜穂子さんや、今回菜穂子さんを通して出会った人たちを、私自身も「いいなあ」と思えるのはなぜだろう。それは、例えば「エイズ」を、「社会問題としてのエイズ」ではなく、「ひとりの人間の問題」として捉えている心のあり方であると思う。問題解決のために全体を見るが、その根底には「人間」が存在している。

人種、宗教、国籍などが違う中で、異なるお互いの立場を想像し合い、多様性を受け入れ合い、価値観の違いを理解し合おうとする人間の生き様に惹きつけられた。

（みやざき ひさみ）

ある戦争孤児の歩み

ひとり生かされて・そして今

中島 弘子

二十一世紀は「命を大切にする心の時代」だと言われるようになり、これからこそみんなが平和について考え、心豊かに生きようと声に出して協力し合える時代が来るかも知れない。

そんな期待をし始めていた矢先、２００１年９月11日、アメリカで大変なテロ事件が発生してしまいました。

飛行機が突っ込み、ビルが崩壊していく様子を見て、私はとっさに第二次世界大戦時の東京大空襲を思いだし、やりきれない思いになりました。

あの建物の中にどのくらいの人たちが折り重なって悲痛な叫び声をあげているか。あの東京大空襲下、両親や兄姉弟妹たちが爆撃の火の手にあおられて逃げまどう姿と重なり、言いようのない涙になりました。

また、戦争が始まってしまいました。

アフガニスタンの幼い子どもたちが生きるために路上のあちこちで働いていました。報道記者が、「なぜ働くの？」「お金がないからさ」「本当は何がしたいの？」「学校へ行きたい」「その夢は？」「医者」「エンジニア」。

「ああ、昔の私と一緒」、その健気な子どもたちに私の少女時代が重なり、また愚かな戦争への怒りになりました。

家族を失って

１９４５年３月10日の東京大空襲で犠牲になった私の家族七人は、その後、どこに始末されてしまったのか墓もなく、その家族の無念な思いは、半世紀余も過ぎた今も私の心の中に消えることなく生かされています。

当時私は、新潟のお寺に学童集団疎開をしていました。小学校５年生の時でした。

戦後、政府からは何の手だてもなく、戦災孤児として見捨てられ、帰る家がなくなってしまった私は、親戚や他人の家を転々とするようになり、中学の義務教育も受けることができない生活になりました。

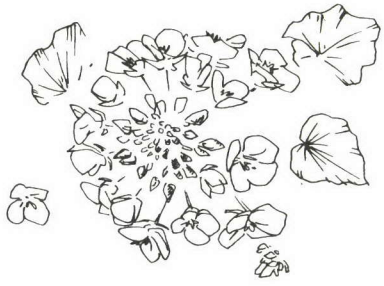
生きるために住み込みで働ける場を求めました。学歴がないために、志した職業の一つでもあった看護婦にもなれない悔しさ、そんな世の中の矛盾の壁にぶつかりながら「疎開なんかしないで空襲で一緒に死んでしまえばよかった」と、何度思ったことか、「なぜ人間は戦争をするのか？」「人間の心とは？」「信じられるものは何？」「それは自分自身」「それは誰も恨まないで生きられる方法なんだ」と分かるのに時間はいりませんでした。

わたし　戦災孤児なの
へえー
何なの　その蔑みの目は
何なの　その哀れみの顔は
何も分かっちゃいないくせに
私の家族は国に殺されたのよ
だから今の平和があるのよ
冗談じゃないわ

（もう、これ以上悲しいことはないだろうと、与えられた運命に抵抗もできずに生きていた10代の頃の心の叫びでした）

46歳の中学生

１９５５年、そんな私にも拾う神様が現れて結婚しました。そして、２人の息子も親離れをした１９７９年、46歳の時、中学にも通信教育があることを知り、長い間心のしこりとなっていた学校



への思いが一気に噴き出し、私は飛びつく思いで入学しました。

基礎からの勉強が始まりました。30数年ぶりに始めた勉強は暗中模索のトンネルに入り込んでしまったようでした。しかし、学ぶほどに中学の勉強は、人間が生きるために必要な基礎学問であることを実感していきました。それは「生きること」を基点にして全ての科目、国・数・英・社・理・音・体などが円周上にみんなつながっていて、どの科目も育つ過程には欠かすことのできない学問なんだということ、誰もが無意識に体の中に持っている資質を発見させてくれる大切な勉強なんだということでした。

今、登校拒否児童がふえています。なんとか学ぶことの大切さ、発見する喜びを気づかせる方法はないものかと思います。全ての先生にそれを求めるのは無理かも知れませんが、教え方の上手な先生に出会うと苦手だと思っていた科目が好きになるのです。

当初は苦しかった勉強も、やがて学問の奥深さも分かり初めるとその思いは更に通信高校へと私を駆り立てました。

そして大学

そして、中学入学当時には考えられもしなかった大学（通信教育過程）にも進学することができて、「法律の基は家庭にあり」というすばらしい講義に感動し、１９９２年卒業することができました。59歳になっていました。

中学に入学してから13年目、積木を一段一段積み重ねるが如くの勉強でしたが、ひとり生かされていた時代が支柱となって、自分なりに歩いて来られたかと思っています。

そんな勉強をしている私に家族は優しい無関心でいてくれました。

「さあ、これからは学歴の壁もなく振り出しに戻って何でもやれるぞ！」心のしこりもとれて本来の自分に戻れた爽快感でした。

心の探求

そして、かねてから考えていた人間の生き方、心の探求をとカウンセリングの勉強を始めまし

た。

カウンセリングの学習の仕方として、私は何人かのそれぞれ異なる先生方の講座をある期間受講し、その理論と、戦後の自分の体験を重ね合わせながら、糧としていきました。

カウンセリングの学習は、自身を見つめながら、共感する心や思いやれる心を知ることであり、一人ひとりがこの事に気づき、日常生活の中で自然に取り入れることができるならば、みんなが優しく心豊かに生きられるはず。それが戦災孤児にされた私の「世界平和」への思いなのです。

ＮＰＯ＝ＳＯＳ総合相談グループ

そんな学習をして講師養成コースを終えた時、友人から千代田区神田にある「ＮＰＯ＝ＳＯＳ総合相談グループ」の相談員にと紹介されました。

この相談グループの活動の主な財源は、企業や一般会員との委託契約や寄付などで賄われており、パワー溢れる北武雄弁護士を代表にして、日常生活での悩みや心配事など、あらゆる相談に応じています。

ここには弁護士・公認会計士・一級建築士・不動産鑑定士・社会保険労務士・心理カウンセラーなど三十業種あまりの専門家がいて、実務面から精神面に至るまで、曜日ごとの定日に電話や面接でアドバイスをしています。

このグループの利点は、一人でいくつもの悩みを抱えている場合でも、それぞれの専門家に連携プレイができることです。

私はここで心の相談のお手伝いをしています。

事例(1)

Ａ子さんは抑うつ症になり、その上仕事帰りに車に跳ねられて重傷を負いました。入院中自分の知らない間に交わされていた加害者と被害者側（Ａ子の親）との話し合いに疑問をもち、本当のことを知りたいと相談がありました。

電話の向こうから聞こえてくるＡ子さんの声や話し方はとてもしっかりしていて私はちょっとホッとしました。そのことを言うとＡ子さんはうれしそうにうち解けて、抱

えている悩みを話してくれました。その内容は複雑に重なり合っていたので私は、弁護士・損害保険の担当者に連携しました。

その後、A子さんに私の体験をちょっと話しましたら、「私も元気になったらもう一度勉強します」と明るい声で言ってくれました。その前向きなことばに感動し、私もうれしい元気をいただきました。

事例(2)

B青年は、今の仕事をしながら進路に悩んで相談に来ました。

「今一番やってみたいことは何なの？」

「〇〇です」

「じゃ挑戦してみましょうよ。駄目で元々。まだ24歳、やり直しができる年齢よ。5年やってもまだ29歳、それに独身、そのためにお金が必要なら余暇時間に出来る仕事をもう一つ探してお金を貯める。好きなことをするためならがんばれるはずよ」

彼の母親は、彼が5年生の時、家族を捨てて他の男性の元へ去ってしまいました。

その後、父と姉と三人で暮らすようになりましたが、三人はきっと助け合って生きてきたのでしょう。素直に人の話しが聴ける好青年でした。帰るとき、「お母さんって呼んでもいいですか」

「いいわよ、息子が三人になったみたい」

素直さ。彼は忘れかけていた大事なことを思い出させてくれました。そして彼は今、目標にしていた仕事に就いて、水を得た魚のように元気でがんばっています。「僕も将来困っている人がいたら助けてあげられるような人になりたいです」。そんな手紙をくれました。これからの成長を楽しみにしています。

様々な相談の中で気になることに離婚問題があります。子どもがいる場合、その子どもが登校拒否になり、二重三重の苦しみになってしまうこともあります。定年後はゆっくり老夫婦で余生を送ろうと思っていた時、そんな母子がやって来ます。親業というのは生涯定年がないのですね。

平和への思い

第二次大戦後、廃虚と

化した日本を復興させようと人々は一生懸命働いていました。人間、どん底に突き落とされると遮二無二なれるし、我慢もできました。

やがて経済大国になり、そしてバブルの崩壊、不況、リストラ、失業、また、戦後の振り出しに戻されてしまったようです。あの頃を思い出して、と言っても当時を知らない世代には通用しません。今は町に物があふれ、ドアの前に立てば、手もかけずにドアが開くのが当たり前、科学の発達は生きる環境の多様性を生み、良くも悪くも人間を変えていきました。物資が豊富にあり過ぎるとあらゆる欲望のコントロールができなくなっていまうのでしょうか。

渇望の果てに創られた現代社会をこれからどう導いていけばよいのか、大人の責任を思います。そんな中でも模索しながらがんばって生きている若者たちもたくさんいます。

この少子化時代に子どもを保育園に預けて、子どもの病気に右往左往しながら働いている夫婦、外で働く母親に限らず、自由なように見えて実は孤独？な専業主婦で子育てをしているお母さんたち（私もかつてはそうでした）。

これから二十一世紀を担って行く世界の若者や子どもたちが心豊かに生きられるように、与えられた試練を自分でコントロールできる自信と、互いに認め合える心育ての大切さを、共に考えながら歩いて行けたらと願わずにはいられません。

空襲犠牲者名簿

今年も間もなく3月10日がめぐってきます。東京都は２００１年３月、両国にある震災記念堂の一隅に、空襲犠牲者追悼記念碑を建立し、犠牲者の名簿を納めました。私は両親や兄姉、幼い弟妹の顔を一人ひとり思い出しながら、その名前を遠くに霞ませながら記しました。

56年も経てやっと永住の場所を与えられ、一方で複雑な思いを抱きながらも、今はただ記念碑に平和を祈り、守り続けなければならないと思っています。

（なかじま ひろこ）

特集・子育てをささえる

小さな子を 大人のものさしではからないで

それは少子化対策の第一歩です

広岡 守穂

日本社会は子育てにやさしくない

少子化がすすんでいます。2000年の国勢調査では、15歳以下の人口（年少人口）がとうとう65歳以上の人口（老年人口）より少なくなってしまいました。日本歴史はじまって以来の未曾有の事態です。

政府も少子化対策に乗り出していますが、はたして日本の社会構造そのものを変革するような抜本的な対策なしに効果が上がるかどうかはわかりません。

ところで昨年9月に、米子市で子育てについての国際討論会が開かれました。主催者は鳥取県。鳥取県は子育て支援に力を入れている県で、昨年6月に「発信！ひとりっ子応援ビジョン21」を策定しています。

シンポジウムのテーマは「どこが違うの　日本の子育て　世界の子育て」。日本で子育てをしている5人の外国人と外国で子育てを経験した5人の日本人がパネラーになって、日本の子育てを世界の視点から考え直してみようという企画です。子育てに、こうでなければならないという決まりは多くないはず。あまり窮屈に考えず、もっとリラックスして、のびのびと子どもを育てようではないですか。そのために世界の子育ての様子をちょっとのぞいてみませんか。そんなねらいで開催されたシンポジウムでした。

シンポジウムはたいへん盛り上が

りました。外国人のパネリストからは「日本では子育ては母親の仕事とされて父親は子育てしていない」「わたしの国では父母は同じ立場」といった意見が続出しました。

「日本人は、子どもはかわいいと思っていても、他人の子に話しかけるのは失礼と思っているのではないか。遠慮していると思う」

「オーストリアでは、どこでもベビーカーが使えた。バスや電車にもベビーカーで乗り降りできて、ベビーカー用の場所がある。近くの乗客がさりげなく手伝ってくれる」

「マレーシアでは用事があれば近所の人に気軽に子どもを預かってもらう」

「アメリカ人はグループを作るのが上手で、共同保育のグループもたくさんあって助かった」などなど。

日本人パネリストも外国人パネリストも「日本社会は子育てにやさしくない」と異口同音に語ったのが印象的でした。

夜ふかしの子がふえている

子育てにやさしくない日本社会。そんななかで、いま子どもたちの生活は、無理矢理大人のペースに引き込まれています。

たとえば夜ふかしの子が増えています。小学生ばかりではありません。1歳児、2歳児も平均してとても夜更かしになっています。ある調査によればいちばん夜ふかしなのが2、3歳児です。保育所や幼稚園に通うようになる前の子たちがいちばん夜ふかしなのです。

わたしの小さいころは、子どもの時間は夜9時までと決められていました。9時になると子どもは有無をいわせず寝させられました。テレビも9時になると、小さなお子さんは寝るようにとアナウンスしたものでした。いいえ、そもそも親やテレビにいわれなくても、9時ごろになったら眠くて眠くて目を開けていられなかったものでした。

親の生活が夜型になっていますから、子どもが宵っ張りになるのもやむを得ない面があるのですが、それでもちょっとどうかなとまゆをひそめたくなるようなこともあります。

3歳児で、夜11時ごろまで起きていて、いったん両親といっしょに寝るけれど、深夜2時ごろに目を覚ましてそれから朝方までひとりでビデオを見ているという子がいます。こんな生活ですから目が覚めてもぐ

ずってばかり。指しゃぶりをしたり、おしっこやうんちを失敗したり、いつも機嫌が悪い。お母さんは心配していますが、生活習慣が夜型になっていることにそもそもの原因があるとは気づいていないようでした。

ちょっと横道にそれますが、1歳の男児の20％が自分ひとりでビデオを操作できるという、びっくりするような調査結果があります。2歳児では約半分の子が自分でビデオを操作できるようです。小さな子はブラウン管が好きですから、放っておくといつまでもテレビの前にすわっています。好きなビデオは何回でもみて、セリフをそらで覚えたりします。

テレビの前ではおとなしくなるものだから、子どもに長時間テレビを見せている親がいます。いいこととはいえません。テレビでは子どもは成長しません。子どもの成長に対人関係は不可欠なのです。他人の気持ちがわかるということは高度な知性の働きです。相手の表情から感情を読みとること、そしてそれによってコミュニケーションすることが、人間の成長にとってはたいへん大切なのです。

朝ご飯を食べずに学校に来る小中学生もふえています。理由はいろいろありますが、いちばんの理由はやはり夜ふかしでしょう。夜ふかしすると朝寝坊するから、食事をしていると遅刻してしまうということもあるでしょう。夜ふかしするとどうしても夜食を食べるものだから、朝起きても食欲がないということもあります。

早寝早起きは生活の基本です。でもこのごろ日本人は生活習慣のことをあまりやかましくいわなくなったように思います。テレビやラジオばかりでなく、まちには24時間営業の店がいくつもあり、大人たちも昼夜の区別なしに働いています。でもそういう生活にあわせることが、子どもの成長に良いとはいえません。イギリスやドイツでは、いまでも子どもは8時になったら寝させるようにしています。テレビも8時になると子どもたちは寝るように放送しています。子どもたちはお父さんお母さんにお休みを言って、自分で自分の寝室に行きます。

規則正しい生活は成長の第一歩です。生活習慣が乱れていると、精神的にイライラすることが多くなります。子どもにきちんとした生活習慣を身につけさせることがおろそかになってしまったら、日本の社会はど

うなるのでしょうか。

小さな子を大人のものさしで はからないで

子育てにやさしくない社会は、大人の事情が優先する社会です。その影響で、わたしたちは、ついつい子どもを大人のものさしではかっているのではないでしょうか？

Aさんと Bさんはともに2歳6カ月くらいの年ごろの女の子がいました。二人はときどき子どもを預かりっこしていました。

ある日のことです。Bさんの子どもの服のポケットからAさんの子どものおもちゃが出てきました。どうも前の日に持って帰ったようです。そこでAさんはBさんの子どもに言って、おもちゃを返してもらいました。

このできごとをBさんに伝えるかどうか、Aさんは迷いましたが、やはり伝えたほうがいいと思って、Bさんにそのことを話しました。

AさんはBさんを傷つけないように、気をつけて上手に話したつもりでした。ところがそのことがあってから二人の関係は何となく気まずくなってしまいました。BさんがAさんを避けるようになったのです。

さて、こんなことで二人の関係が気まずくなるなんて、ちょっとおかしいのではないでしょうか。

どこがおかしいのでしょうか？

2歳6カ月の子どもには、自分のもの他人のものという区別はありません。Bさんの子どもは友だちのおもちゃを盗んだのではなくて、とてもほしかったから持って帰っただけなのです。してはいけないことという気持ち自体が、そもそもありません。

小さい子はよくおもちゃの取り合いをします。そんなとき小さい子は、他人のものだけどほしいとか、自分のものだからあげないとか、考えているわけではありません。ただほしいだけです。

ですから、こんなとき大人はいちいち目くじらをたてません。どの子がどの子の所有物を奪い取ろうとしているだの、盗もうとしているだのとは思いません。もしある子が無理矢理よその子の持ち物を取り上げたら、「それは○○ちゃんのだから、返してあげてね」と教えてあげます。そしてそれによって小さな子はひとのものを取ってはいけないということを少しずつ覚えていくのです。

Bさんの子どもがおもちゃを持って帰ったのは、それとおなじです。よくあることですから、まったく気にすることはありません。こんなちっちゃな子のすることを、大人のものさしで見てはいけません。

さて、BさんはどうしてAさんを避けるようなそぶりをみせるようになったのでしょうか。きっと自分の子どもに盗癖があると指摘されたかのように受け止めてしまったのでしょう。そして自分までいっしょに非難されたと感じたか、または恥ずかしくなってしまったのでしょう。Bさんはまるで自分が攻撃されたような気分になったのかもしれません。

一方、どうしてAさんはBさんを傷つけないように話さなければと思ったのでしょうか。そこにはやはりBさんの子がおもちゃを「盗んだ」、という受け止め方があったのではないでしょうか。

AさんもBさんも、お互いに子どもを大人のものさしではかってしまい、お互いに相手に気をつかいすぎたのです。

子どもの行動は大人とは違います。自分のものと他人のものの区別がないのは小さい子には当たり前。子どもの世界と大人の世界は違うのです。だから子どもは可愛いのではありませんか。

おおらかな気持ちで、子どもたちの成長を見守っていきたいものです。

入場券の代金をみんなでどう分けるか？

子どもには子どもの世界がありルールがあります。次に述べるエピソードは『父親であることは哀しくも面白い』（講談社、２００１年）に書いたことなのですが、わたしにとってはたいへん印象的なできごとでしたので、もう一度書きます。シチュエーションをちょっと変えてありますが、話の筋は変わりません。

次男が中学生だったときです。あるときわたしはイベントの入場券を２枚買いました。ところが用事ができて行けなくなったので、２枚の入場券を次男に譲りました。次男はその券を持って、仲良しの友だち３人をさそってイベントに行きました。さて４人はお金の払いをどうしたと思いますか。またどうするのがいいと思いますか。

(1) ２人分の切符のお金を４等分し４

人が同額のお金を払う。

(2) 次男は入場券を提供したのだからお金は払わない。2人分の入場券のお金を3等分し、残りの3人が同額のお金を払う。

(3) 入場券を使う2人はお金を払わない。のこりの2人はそれぞれ自分の切符のお金を払う。

(4) 1人が次男から入場券を買う。あとの2人は会場で入場券を買う。

わたしは、(2)が良いと思いました。次男が提供した2枚の切符はもともと親のわたしが買ったのですから、次男がそれ以上お金を出すことはありません。かといって、(4)のようにみんなが1人分のお金を払うことも

ないと思います。もしかしたら使わなかったかもしれない切符ですから、その分くらいわたしが負担します。みんなもいくらか安く入場できれば儲けものです。(1)のようにわが家が2人と4分の1のお金を払うのはどうかと思います。まして(3)のように1人だけお金を全然払わないのはおかしいでしょう。

みなさんはどうお考えですか？ちょっと考えてみてください。

次男たちはどうしたかというと、彼らがとった方法は(1)でした。わたしは最初へえと思いました。しかし中学生くらいの子に聞くと、たいてい(1)が公平だという答えが返ってきます。出所がどこであれ、4人の仲間にとって、2枚の切符は外からやってきたものです。だから残り2枚分のお金を4人で公平に負担すれば

いい。それが一番公平だ。だれの親がお金を負担していようと、それは関係なし、というわけです。

理由を聞いて、わたしはなるほどなあと思いました。考えてみれば子どもたちはみんな対等です。親が裕福だろうが貧しかろうが、どんな方針で子どもを育てていようが、子どもたち同士にとっては関係ありません。子どもたちにとっては、それぞれ本人だけが大事なのです。

勇敢な子、意気地のない子、成績のいい子、かけっこや野球の得意な子、取っ組み合いに強い子、絵の上手な子、みんないろいろです。子どもは子どもだけでひとつの世界をこしらえています。親がどうだのこうだのということは、子どもたちはついぞ考えたことがありません。本人同士だけが大事なのです。それだか

らこそ子どもの世界はいいのだと思いました。子どもたちに教えられたような気がしたものです。

ゆとりのある社会をつくりたい

わたしたちは、ついつい大人の目で子どもをみているのではないでしょうか。その事例を3つあげてみました。3つのどれにもいえることですが、わたしたちは大人の都合にあわせて子どもをみる傾向がだんだん強くなっているように思います。

子どもには大人と違う、子どもの世界があります。かけがえのない純真な世界です。それを子どもは大人になるうちにいつの間にか失ってしまいます。大正時代に小川未明などの童話作家が書いた童話には、そんな子どもの姿が美しく描かれていました。

子育てにやさしい社会とは、同時に子どものかけがえのない純真さを大切にする社会でもあるはずです。そのためには大人が子どもの世界をきちんと受け止めるだけのゆとりがなければなりません。しかし、いまの子育て中の若い親にはそんなゆとりはありません。いまのように仕事と子育ての両立が困難な状況のなかで、そんなゆとりを持てといっても無理でしょう。それに地域社会はかぎりなく弱くなり、隣近所で子育てをささえあう基盤が崩れてしまっています。なにより、日本の父親は相変わらず、子育てにあまりかかわろうとしていません。すべてが大きく変わらなければならないのです。

少子化対策は容易でない。つくづくそう感じます。（ひろおかもりほ）

＊自動ドアはいいのか？悪いのか？

日本では、今ではどこにでもある自動ドアですが、ドイツでは逆に自動ドアが、ないそうです。それは、ドアを通り過ぎるとき次の人がいたら開けておいてあげる、という親切な心を、小さいころから教育するためです。日本人は見ていると、ドアを閉めるとき、後ろの人に気を使って振り返るということが少ないように思えます。ドイツでは車イスやベビーカーの方のためにドアを開けて待っている、そんな習慣があるそうです。ドイツから戻ってきた日本の子どももしているそうですよ。優しい光景だと思いませんか。自動ドアは一見楽そうですが、人と人の触れ合い、他人を思いやる気持ちを忘れさせているのかもしれません。手動の良さもありそうですね。

特集・子育てをささえる

海を越えて日本で子育て

外国女性の子育て奮戦記

岸　薫

東欧生まれのレイラさん

河野レイラさん（仮名）は、東欧で生まれました。小さい頃は、木登りをしたり、森へ探検に出かけたりと、暗くなるまで遊びまわりました。お父さんは、国語の先生をしていて、レイラさんにいろいろな語学を身につけさせました。学校で、フランス語とラテン語を勉強し、ドイツ語はドイツ人の家庭教師に習いました。英語は、近所にイギリス人の子どもがいて、小さい頃から一緒に遊んでいたので自然にしゃべれるようになりました。英語はこれからのレイラさんの人生で重要な意味を持ってきます。

17歳で働きはじめる

ルーマニアは、高校はすべて専門高校です。レイラさんは、エレクトロニクスの専門校で勉強しました。おしゃれをしたい年頃。洋服やアクセサリーなど買いたい物がたくさんありましたが、厳格なお父さんはお金を出してくれません。お父さんとケンカをしたレイラさんは、自分で働くことを決心しました。

語学力を買われて17歳で高校を卒業すると、学校で学んだことを生かせる大きな金属加工会社に就職しました。最初はペンキを塗ったり、雑用が多かったのですがある日、レイラさんの運命を変える出来事が起こります。

会社には、世界中から機械を売りこみにいろんな国の人がやってきました。機械の説明書はたいてい英語で書いてあります。会社のエンジニアたちは英語が読めず、苦労しているのを見たレイラさんは、説明書を翻訳してあげたり、たまに通訳をしてあげたりしていました。

日本男性との運命の出会い

すると、ある日急に、自分用のオフィースを与えられ、「これからは通訳の仕事をするように」といわれました。仕事があるときは車が迎えに来て、パーティーなどにも出席するようになり、生活が随分変わってきました。そして、通訳の資格も取り、仕事も忙しくなった頃、日本からやって来た男性と運命的な出会いをします。

20歳近く年上の彼はシャイで、19歳のレイラさんには「かわいい人」と映りました。彼が日本に帰ってからは、国を越えた遠距離恋愛を続けました。二人は、電話や手紙で愛を育みました。「日本に来たら、絶対幸せにしてあげる。」彼からの熱烈なラブコールで3年後二人は、めでたく結婚します。彼から届いた手紙は150通以上になりました。

レイラさんの両親は、結婚して日本に行くことに反対はしませんでした。「子どもは親の持ち物ではないから自由にしなさい」と言ってくれました。昔からレイラさんは、何でも自分で考えて行動する性分。こうだと思うと、誰がなんと言おうとやり通してしまうタイプなのです。両親は、レイラさんがどこに行って、何をしようと大丈夫と絶大なる信頼をおいていたようです。

新婚の地は 山奥の村だった

「日本に来たら、絶対幸せにしてあげる。」彼の言葉を信じて、日本にやってきたレイラさんは、日本語を全く知りませんでした。しかし、不安は全くなかったといいます。そんな彼女がやってきた新婚の地は、たった3軒しかない山奥の村！しかも、夫の両親と同居。3軒といっても1軒々々の距離は1キロあります。近くの町までは7キロ。自転車にも車にも乗れないレイラさんにとって、夫が運転する車かタクシーしか町へ行く交通手段はありませんでした。日本人でもホームシックになってしまいそうですが、レイラさん

はたくましい！探検するのが大好きだった幼い頃のように、この山村でもいろんなところを探検しようと意欲満々。そして、科学者の気分でどんな生き物がいるか興味津々。

２軒のご近所さんのうち１軒は親戚ですが、もう１軒は血縁関係がないためあまり行かないようにと言われました。人恋しくて、人と話しをしたいと思うこともあったそうです。夫とは英語で話していましたが、舅、姑は英語は分かりません。そこで日本語を舅、姑から習おうとするのですが、例えば「みかん」を指差して、「何？」と聞いたら「み・か・ん」と教えてくれればいいのですが、名前ではなく、みかんの説明になり、しかも早口の方言なので全くかりませんでした。そこで、レイラさんが苦肉の策で選んだ日本語の先生はなんと、テレビ！

赤ん坊と二人 離れで寝た日々

こんなポジティブなレイラさんですが、不安になった時もありました。それは、妊娠した時。夫のほかに相談できる人がいなかったからです。生まれた国へ帰って里帰り出産は無理だったので、町の産婦人科に通って出産しました。入院する時、病院側が気をきかして個室にしようとしたのですが、「とんでもない！これ以上孤独になりたくはありません！」と言って６人部屋にしてもらいました。看護婦さんや他の妊婦さんと話しができたのが、とてもうれしかったそうです。

赤ちゃんを家に連れて帰った時の夫の言葉に、レイラさんは驚いてしまいました。

「赤ん坊の泣き声がうるさくて眠れないから、赤ん坊と二人で隣りの家で寝なさい。」

敷地内には２軒家がありました。１つは、みんなが暮らしている築60年の２階建ての家。もう一つは、１２０年以上経っているわらぶきの古い家です。夫はそちらに行けといったのです。レイラさんの国では、赤ちゃんが生まれると、夫婦は同じ部屋で寝て、赤ちゃんを隣りの部屋で寝かします。ドアは開けっぱなしで、泣けばいつでも行けるようにしてあります。それが、レイラさんと赤ちゃんが一緒に寝て、夫は別に寝ることになってしまったのです。それだけでもかなり戸惑ってしまいましたが、古い家は真っ黒にすすけていて、古い仏壇まであります。トイレも外

に行かなくてはいけません。トイレに行く途中、気味の悪い大きなカエルまでいます。怖くて怖くてしょうがなかったそうです。

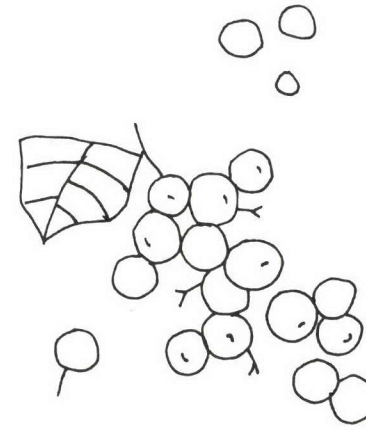
食事は、みんなといっしょに新しい家のほうで食べますが、夜の9時になると、夫は「お前はもう寝なさい。」と言って、レイラさんと赤ちゃんを古い家に帰してしまうのです。「9時に寝ろなんて、私は子供じゃないわ！」レイラさんの堪忍袋の緒も切れてしまい、1ヶ月目にやっともとの家に戻れました。

子どもを連れて行動開始
そして病気・入院

姑は若いころ農作業が忙しくて、子育てはその姑にまかせっきりだったといいます。そのため、レイラさんには、子どもの育て方を教えてくれる人がいませんでした。しかたがないので、妊娠中に母が送ってくれた子育ての本と、入院中に病院で教えてもらったことを参考にしました。布オムツも縫い、離乳食も自分で作りました。冬は、洗濯機のホースが凍ってしまって、川で洗濯したこともありました。まるで、「おしん」のようです。

しばらくして、レイラさんはベビーカーに赤ちゃんを乗せて、町まで歩いて行くようになりました。といっても、7キロの道のり！しかも、行きは下り坂で楽なのですが、帰りは上り坂で大変でした。友だちがいるわけではありませんでしたが、買い物をして人としゃべれるだけで楽しかったといいます。

子どもが9ヶ月の時、農作業から帰ると普通ではない泣き声が聞こえてきました。



あわてて、ベビーベッドにかけ寄ると顔色が紫色になっているではありませんか。タクシーを呼んでもらおうとしても姑は「大丈夫、大丈夫」というだけでらちがあきません。1キロ先の親戚の家まで走って行き、「子どもが死んでしまう！」と必死に頼んでやっと車を出してもらいま

した。病院に着くなり、入院。

3週間熱が下がりませんでした。結局原因は不明でしたが、多分、山の植物のアレルギーだったのだろうとレイラさんは考えています。

6人部屋に入院していたため、付き添いの親は寝るところがなく、子どものベッドの下で寝ました。夫と舅は、たまに見舞いに来るぐらいでした。誰も交替してくれなかったので、3週間お風呂には入れませんでした。さすがのレイラさんも、ヘトヘトだったと言います。

英語教室を開く

子どもが1歳半の時、町から頼まれて週1回英語を教えるようになりました。そのおかげで、友だちもできました。その頃、町へ行き来するのに、自転車が欲しくなって夫に話しました。すると、応えは「自分で働いて買えば」というつれないもの。普通、妻はここで爆発しますが、レイラさんは違います。「それなら、働きましょう。」と、英語教室を開いてお金を貯めて自転車を買ってしました。

レイラさんの国では、ほとんどの女性は仕事を持っています。女性も働くという事は当然の事なのです。専業主婦については、「1日中家にいて何をするの?」と、レイラさん。ここでも英語は、彼女に働く機会を与えてくれたようです。

自分のお金で買った自転車は、恥ずかしいので夜練習をして3日でマスターしました。それまでは、子どもをおんぶしていろんなところに行っていたそうです。

レイラさんが日本に来て驚いたのは「おんぶ」でした。レイラさんの国では、子どもをおんぶするという習慣はありませんでした。しかし、これをマスターするとなんと楽なことか!背中に子どもをおぶって、どこにでも出かけていきました。しかし、これからは自転車というすごい味方ができたのです!がぜん行動範囲が広くなりました。

子どもが幼稚園にはいる前の年に、隣の県の大きな町に引っ越しました。そこでも英語教室を開くことになりました。子どもが1年生の時、「もっと動きたい。もっと遠くに行きたい。」と思い、今度は自動車免許を取り、車も買いました。それまではお小遣い程度の収入でしたが、英語の仕事も増えてきました。車の諸費用から、子どもが高校に行くま

での教育費も全て自分がお金を出しました。高校からは、やっと夫が払ってくれるようになりました。

夫は、決して悪い人ではありません。でも夕食の仕度が出来てないと怒り、子どもがおもちゃを出しっぱなしだと怒る。怒っても、片付けてはくれない典型的な日本の「夫」です。食事も5品揃っていないと怒り、5品あっても「栄養のバランスを考えてない」と言い、何をしても文句を言います。レイラさんが怒って「もう、何も作らない！」と言ってからは少しずつ家事を手伝うようになり、今ではゴミ出しができるようになったそうです。レイラさんの夫はけっして特別ではありません。日本の「夫」にはこういう人も多いのではないでしょうか。夫は「ご主人様」になりたいと思っていると、レイラさんは言います。そして、「そろそろ、雲の上から下りてきて欲しいものです。」と、苦笑します。

レイラさんは海を越えてやってきたヒーラー？

レイラさんは、「女性が文化を運ぶ」と思っています。ヨーロッパでは家の中におばあちゃんが作った刺繍や飾りなどがあり、女性の「気持ち」が代々伝えられていきます。しかし、日本では女性の立場が男性より低く、女性の「気持ち」が伝えられているような気がしないといいます。「子どもにはきちんと私の国の文化を伝えていきたい。それと日本の文化も伝えたい。両方のいいところをブレンドできたらいいですね。」

18年目のお正月、レイラさんのお母さんも東欧からやって来て、姑、夫の弟と家族全員がレイラさん宅に集まり、にぎやかに過ごしました。

レイラさんの奮闘記、いかがでしたか？つらい情況の時も、悲観的になることなく前向きに生き、道を切り開いていくレイラさんのたくましさにまさしく脱帽です。それと同時に、何かパワーをもらったような感じがしませんか？レイラさんのおばあさんは、ヒーラーだったといいます。昔から東欧に伝わる、ハーブなどを使って癒し（ヒーリング）を与え、病を治したりする人をヒーラーといいます。レイラさんもそれをちゃんと受け継いだ、海を越えてやってきたヒーラーといえるのではないでしょうか。

（きしかおる）

特集・子育てをささえる

子育てフリースペースっていいね

さくらキッズルームを訪問して

石田 敦子

さくらキッズルームを訪問して

「北九州市福祉事業団八幡東さくら保育園さくらキッズルーム」を訪れた。

ここは、家庭内で子育てをしている未入園児の親子（幼稚園・保育園に通っていない子どもと親）のために保育所の一室を開放した、行政運営のフリースペースである。平成11年5月18日にオープンし、口コミや回覧版等で情報が広まって、今では多くの人が利用している。

フリースペースのあるところ

北九州市には10のフリースペースがある（H13年10月現在）。そのうち、民間が運営しているものが1ヶ所、行政が運営しているものが4ヶ所、民間と行政が運営しているものが5ヶ所ある。特に、行政が運営しているものは八幡東区に集中している（3ヶ所）。しかし、ほとんどのフリースペースは週に一回の開放または月に2回の開放である。

この点、門司区の「子育てサロンひだまり（行政運営）」とさくらキッズルームは毎週火曜から金曜までの10時から12時まで開室しており、だれにでも利用できる開かれたスペ

ースとなっている。

さくらキッズルームには、木のおもちゃや大きな遊具など、年齢や発育に合わせたおもちゃが充実しており、広いスペースで子どもたちはのびのび遊ぶことができる。また、子ども用の絵本や親のための育児書など、図書の貸出も行っている。さらに保育所の子どもたちとさくらキッズルームの子どもたちとの交流もあり、さくら保育所の運動会の中にさくらキッズの子どもたちのためのプログラムもある。

どんなことをしているの？

室内には専任の保育士が1名ないし2名いるので、親は子育てについての相談をすることができる。毎月第2水曜日に保健婦が来室し育児相談や健康管理、生活習慣、離乳食、身体発達、予防接種についてのアドバイスを行っている。第4水曜日には身長・体重測定も行われ、歯科衛生士が来室することもある。また、市民福祉センターと共催で、無料の育児講座を開催したり、不定期で新聞を発行し、子育てに役立つ地域の情報やママの声などを掲載したりしている。

さくらキッズルームの計画がもちあがった際、多くの保育士が懸念を抱いたと言う。「保育所は有料で子どもを預かる場所なのに、その隣にタダで子どもを預かるのはいかがなものか」と。しかし、この事業は予想したよりも成功し、参加者もどんどん増えていると言う。保育所と違い、さくらキッズルームは常に親と子が一緒であり、保育所は事故などの責任は一切負わないことになっている。有料である保育所との釣り合いが取れていると言える。

さくらキッズルームの一日

私は、開室から閉室まで、子どもたちと一緒になってキッズルームを体験した。保育士さんから「子どもは見下ろされると怖がるので常に座っててください」と言われたので、ずっと座ったまま、時にはハイハイで移動して子どもたちの様子を観察した。子どもと遊ぶと同時に、キッズルームの感想と父親の育児関与について親に話を聞いた。

子どもたちは一緒に遊んであげるととても喜ぶ。まず、子どもと打ち解けてから、その子の親に話を聞くことにした。

近くに友だちがいない

最初に社宅に住む1歳1ヶ月の男の子のお母さんに話を聞いた。社宅ということで、やはり同じ年頃のお子さんがたくさんいるのではないかと質問すると、何人か子どもはいるが、公園では見掛けない、という答えが返ってきた。お母さんたちはグループを作り、みんなでどこかへ出掛けたり、子どもを保育園に預けたりしているようで、近くにいないも同然ということだった。だから、このキッズルームを利用して、育児情報を集めているのだと言う。

父親の育児関与について質問すると、休みの日は遊んでくれている。休みのないパパも多いので我が家はまだいい方かな、と照れ笑いをした。満足いく育児関与ではないけれど、パパも忙しいしあきらめています、とのことだった。

双子は大変

次に双子の女の子のお母さんに話を聞いた。やはり双子ということで、何をするにも2倍の労力を必要とするという。キッズルームまで出てくるのがまた大変で、大騒ぎしながらだという。保育士の存在について質問すると、いろいろ相談できてすごく安心する、との答えが返ってきた。部屋の中に保育士がいるといないのとでは大違いだとのこと。

年の違うお友だちを求めて

3人目は9ヶ月の男の子のお母さんに話を聞いた。まだ来はじめてさほど経っていないキッズルーム初心者だという。彼には兄弟がいないため、年の違うお友達と接することで社会性を身につけてもらいたいとのこと。お父さんは子育てに関与してくれるが、言わないとやってくれないので不満が大きいそうである。また、買い物に行きたいというと、家で子どもの面倒を見てくれるのではなく、子どもを連れてついてくるので、結局ゆっくりできない、と笑っていた。

お父さんも キッズルームに来たいのに

4人目は1歳1ヶ月の男の子のお母さん。お父さんは公務員をしているとのこと。公務員なので比較的休

みは取りやすいらしく、お父さんが休めるときは父母でキッズルームに来ているという。しかし、キッズルームでは人目を気にせず母乳をあげるお母さんがいるので、お父さんは目のやり場に困ってしまい、結局お父さん1人ではキッズルームに来づらいのだ、と語ってくれた。また、このお母さんにはもう一人子どもがおり、その子はもう3歳なのでキッズルームには連れてこないという。理由は、大きな子どもは、走ったり暴れたりして小さい子どもに危害を加えかねないためだという。また、3歳になれば一時保育もあるので、そちらを利用しているということであった。

父親の育児関与

一応満足しているけれど…

さらに何人かのお母さんから話を聞いたが、やはり、「おもちゃがたくさんあって子どもが喜んでいる」「危険なものがないのでのびのび遊べる」「保育士がいるので安心する」「昼間目いっぱい遊んでくれるので夜は良い子に寝てくれる」「情報交換ができる」という意見が多かった。「ここに来ているから家でキレずに済んでいる」という発言もあった。また、父親の育児関与については「(早く帰宅したときは)お風呂に入れてくれる」との答えが圧倒的に多かった。また、関与の度合については「一応満足しているけれど…」との答えが多く、「私に言われなくてもやってくれれば良いのに」「忙しいからしょうがないか」等のせりふが後に続いていた。皆さん専業主婦ということもあったからであろうか、控えめな発言が多かった。

閉室前の最後の10分程度、手遊びなどをした。お母さんと子どもが一緒になって遊ぶのである。子どもたちはたくさんいるが、あくまでも基本単位は「親と子」のようだった。最後に11月16日にオープンした北九州市福祉事業団運営の「北九州市立子どもの館HOW!?」ツアーを募集していた。このような企画もキッズルームならではのものである。このような企画を通じて、「親と子」という縦のつながりだけでなく、「子と子」「親と親」という横のつながりも広げられれば良いのではないだろうか。

(いしだ あつこ)

海流を切り裂きながらまっすぐに陽をめざしゆく曙の船

木村　郁子

未明に伊勢湾を抜けた1万5千トンの大型船は、潮が滔々と流れる暗い海面を横切るように進んでいく。水平線に暁の兆しが現れると、海の色も刻々と明るんでくる。オレンジ色に染まった雲の間から、金色の光が飛び出したかと思うと、一瞬にして浅葱色の空と紺碧の海…身を清められる思いで、私は仙台へ向かうフェリーの上にいた。

青森では、奥入瀬の渓流に沿って歩いていると、草むらにキツリフネの葉が青々と茂っていた。わが家に見慣れた姿とは、どこか違う浄らかさ…旅先での小さな出会いの一つが、私の中に嬉しい贈り物となる。

東京の友人から、しきりに飛行機での旅に誘われる。

「北海道だって、沖縄だって、アッという間に着いちゃって、二泊もすれば十分楽しめるわよ。とっても、お値打ちだし…」と、スマートさを強調してくれる。

マイカーをどばして、時には、フェリーで洋上を楽しむのが我が家流。確かに、日数も費用もパック旅行とは比べるまでもない。けれど、道草も回り道も逆戻りも可、の旅は、長年の内に私たちの身についてしまった。「フェリーで北海道」も、遠くない日にある。

木村 郁子（きむら いくこ）
岐阜県大垣市在住。一九四七年岐阜県生まれ。一九九五年、歌集『偽善者の糸』出版。

介護の現場～様々な光景から

受託事業を通じて行政からの信頼が高まる

櫻井 浩子

21世紀の年明け早々、私は在宅介護のホームヘルパーとして登録し働き始め、ちょうど半年が経った。半年間の間で、利用者（高齢者）と接する中で感じたこと、また介護保険の理解のズレなどを実体験している。私が今まで担当したお宅は6件、今は3件、週5日で仕事をしている。

1　在宅で支えること

最近、書店には「在宅介護」に関する本が多く出版され出した。理論・制度でなく、在宅の現場からの目を通した内容の著書が少ないことに、立ち読みしながらがっかりする時がある。

ホームヘルパーがその担当のお宅に行くのは、大半2時間程度（事業所によっては深夜巡回サービスを行っているところもあるが、今回は私の所属している一般的事業所の体系に基づいた経験を記したい）、そのたった2時間、人間として触れ合う中でいろいろなシーンに出会う。

ある80歳代後半のおばあちゃん（ホームヘルパーの間では、「おばあちゃん、おじいちゃん」という呼び方はご法度であるが、私はこのお宅では「おばあちゃん」と呼んでいる）は、今年に入って、痴呆がかなり進んだ。最近、私に会うたびに言うことは、「ありさんの家にご飯を届けるのが忙しくてね」である。私は思わず笑いながら話を聞くのである。「ありさんのお家には、ありさんが

いっぱい住んでいるの？」「うん、そうなんだよ。たくさんいるから、たくさんご飯を持っていかなきゃね」「ありさんには、ご飯何を持っていってあげるの？」「虫だよ。虫！」同居している娘さん（60歳代後半、私はこの方を「おかあさん」と呼んでいる）は何も言わず、私に目配り・視線を送った。それは、いつもの私とお母さんとの無言の会話なのである。その無言の意味には「これだけ、痴呆が日に日に進んでいるんだよ」ということである。ホームヘルパーは、毎日行ったとしても、24時間の中のほんのひと時。しかし、在宅で「共に暮らしている」家族にとっては、このような光景が悲鳴にも聞こえてくるのである。「夜、ゆっくり寝たことがない。徘徊したらと思うと心配でね」とお母さんは口癖のように、いつも言う。

私の事業所では、夜中の巡回サービスは行っていない。このお宅の立地を見れば、背後は山道になっており、私自身おばあちゃんの行動範囲がいつも気になる。「ダメ」と言って行動範囲の制限を掛けすぎると刺激がないため、ますます痴呆は進む。しかし、自由にはさせられない。こんな歯がゆさを、日々感じている。ショートステイを勧めても、「そうしてもさー、きっと『今、何しているか？』と思うと、ますます居ても立っても居られないと思うよ。それでも一応、目に届く範囲にいるからね、今は」という。

利用者のニーズは様々で、病院への送迎・付き添いや薬を取りに行ったり、掃除、買い物、クリーニング出し・・・エトセトラである。洗濯の仕方、洗濯物の干し方など些細なことも、お宅それぞれ違ってくる。しかし、ここですべてを「ハイ、ハイ」おこなってしまうことは、介護保険の目的とは異なってくる。「家政婦さん」と間違って認識している人もいる。介護保険が始まる前に、「家政婦さんが来てくれていたの」と言われれば、きっと、この方の中には「家政婦」＝「ホームヘルパー」の図式になっていることも多分にある。この差がトラブルを生みやすい。現実に、利用者さんとのトラブルで辞めていくホームヘルパーが多い。ある事業所は、「家事援助契約だから」と言って、「糸の針通しをしてくれない、シップを背中に貼ってほしいと言っても断られる、爪も切ってくれなかった」と愚痴る人もいる。

私はこの食い違いを埋めるのがケアマネージャーの役目だと思う。ホームヘルパー5年の実務経験で受験資格を手に入れることができるが、今のケアマネージャーは現場の実務経験者が少ない。「車のエンジンをかけたたまま、来られても何も聞け

ないでしょう」と利用者は言う。

ただ書類だけを置いていかれても、字が読めない、1回読んでも理解できない人に対して、その対応はどうだろうか？一言「何でもヘルパーに言って、やってもらってください」では、利用者はどう思うだろうか？私も時々、書類が読めない、理解できない利用者のために、封筒を一つ一つ開けて説明することがある。

できれば、半年間でもホームヘルパーとして現場を見て欲しい。計画書だけでは済まない点も、見えてくることだろう。いろんなことにズレが生じていて、私自身自分の役目に戸惑うことが多い。せめて「介護保険の中で…」という言葉を入れてくれることにより、本来の介護保険の姿が成り立つのではないか？そうすれば利用者とホームヘルパーとのトラブルも少なくなり、在宅介護が充実してくると思う。利用者1人に対して担当者ホームヘルパーを2～3人つけている事業所もあるが、利用者側の声は、実は「一人の人にずっと来て欲しい」と思っている人が多いのである。

ホームヘルパーはかなりプライバシーまで入り込まなければならないケースもある。しかし、通常のサービスの中で入れ替わり立ち代りホームヘルパーが交代し、その度に一人一人に対し利用者が一つ一つ指示するのは、精神的にも慣れるまでに2～3倍「利用者が」疲れるのである。利用者を疲れさせてしまうのは、問題ではないだろうか？介護保険の中での利用者－ケアマネージャー－ホームヘルパーのトライアングルにおける理解のズレが生み出すトラブルはこのようなことにあるのではないか。

人間関係は、どんな社会でも人と人のつながりや情は欠かせない。どんな人でも1人では生きてはいけないのである。それは、高齢者でも障害者でも私自身でも同じことである。在宅介護に従事する側として、心がけ一つでプラスにもマイナスにも転ぶのである。利用者側が「来てくれて良かった」「助かったよ」と思われるホームヘルパーの質も大切である。建前は介護保険であるけれけど、ある部分では心のつながりも必要だと私は思う。縦割りで行う行政もどきのサービスは現場には適さないのである。そして、一人一人のホームヘルパーの力量を、利用者側はきちんと見極めているのである。事業所を何回か変えている利用者の声を逆に聞くことで、介護保険に対してどんなことが期待されているのか、考えることもできるであろう。

そして、平成14年度からは、障害者に対しても介護保険が適用される。

その場合、今の現場が横滑りすると思うと、私個人としては危惧せずにはいられない。

2　ある駅での光景

先日、私の母が実家に戻る際、駅のホームまで見送りに行った。母も老齢のため、少しの時間でも重いに荷物は持たせたくなかった。恥かしながらこう思うようになったのは、在宅介護の仕事を始めてからである。

母は、バリバリのキャリアウーマンとして、県内の養護学校小学部に20年、特殊学級を含め小学校に20年弱、計40年教員として働いてきた。今から30～40年前の養護学校は設立されたばかりだったそうで、教員1人に対して、重度肢体不自由児が23人、一学級にいたそうである。今は、1人対2～3人の体制に変わってきている。私との会話の中で、当時を振り返り「23人の命を、万が一の時、1人で責任は取れないと思った。『何かあったら、どんな方法でもいいから、先生（母）に言いなさい』。23人の子が全員布オムツ、最重度の子も何人かいたし、今思えば、毎日が緊張の中の授業だったのだと思う」と最近、母はこの時代のことを言うようになった。

私が母と駅で見た光景は、ある各駅停車の電車から杖をついた70歳後半の母親が脳性マヒの30歳代の娘さんを、細いおんぶ紐で背負ってホームに下りてきたのである。涙が出た。すぐ、母に荷物を預けて行こうとしたが、そのおかあさんは慣れた手つきでエスカレーターを昇っていかれた。母はその光景を見て「私には、もう出来ない。毎日していないと、できないことだよ」とつぶやいた。私は、泣きながら、在宅介護の歯がゆさを痛感し、悔しくて堪らなかった。

3　日々のサポート

まだまだなんだ。私が見ている光景はほんの一部であり、本人・家族の申請が提出されないと受けられないサービスではなく、地域で支えることが在宅介護のスタートなのだと思う。スタートしたばかりだと言うのではなく、個々の生活は一日一日が大変なのである。同じく、このことはレスパイトサービスにも言えることである。親の想い・子の想い・・・このような光景に目が行くようになった。私も日々、悔しいことがあっても、あの駅で出会った親子の姿を思い出し、まだまだ甘いと自分を叱咤している。この危機感を行政に感じて欲しいと思う。

（さくらいひろこ）

そんなつもりじゃなかったんです……。Vol.17

「馬鹿」五回はNGか否か

加納かがり

ある文章中に、五回「馬鹿」と書いたら、編集者さんから電話がかかってきた。いや、他の雑誌の連載での話。

五回と数えてくださったのは、編集者さんである。私は、たしかに何回か書いたなあ、という記憶はあったけれど、回数までは自分でも知らなかった。

いったいどのようなことかと言い分を聞いてみると、「放送禁止用語に『バカ××』っていうのがあるんですよ。だからこれもどうかと思いまして。しかも、五回使っているんです。入稿の時間が迫っていまして、どうすればいいのか困ってしまっているんですよ」ということであった。本当に、気

の毒なくらい困っているのが感じられた。

私は、それを聞いてほとんど反射的に、「それならカタカナで『バカ』にしましょうか。それなら、少しは語感が軽くなるでしょう？」と言った。その返答をした時点では、せっかく書いた原稿をボツにされちゃかなわんなあ、ということしか頭になかった。

しかし、編集さんの言葉は、それでも歯切れが悪かった。「うーんそれでもねえ、もし雑誌に抗議があったときのことを考えると……」

それに答えて私。「あ、抗議があったら、直接私に回してくださいよ。文責は私にあるんですから」と返しながら、そうよ、抗議などあるわけがないという確信が、その時しっかり頭をよぎりはじめていた。そう、少なくとも編集さんが心配しているような形では。

だって、その文章は、たしかに馬鹿という言葉をテコにして話を展開してはいるが、特定の人やグループを誹謗しようとしたものではないし、それどころかむしろ、個人的な「差別や偏見の解体過程」について書いたものだったからである。

差別用語に関する私の考えはこうである。要するに、その言葉を使った人の態度や姿勢が重要である。「バカ」だって、人を侮辱する言葉にもなれば、シチュエーションやイントネーションによっては、愛情やのろけの表現にだって

なる。乱暴な言葉にも詩的な言葉にもなる。いや、使いようによっては「乱暴で詩的な言葉」にさえなるのだ。

それから、イヌやブタも普段は普通の言葉だが、使う人の姿勢によっては人を侮辱する言葉にもなり得る。そういうことだ。

それからもう一つ。これもきわめて重大なことだと思うが、「馬鹿」という、あまりにも・あまりにもポピュラーかつ重要な言葉を、言葉狩りしてどーすんの？　と私は強く思った。ええーと、「馬鹿」という言葉の重要性については、……もう、とてもじゃないけれど、ありすぎて書ききれないから割愛する。

さて、編集さんの発言だが、さらにさらに歯切れが悪かった。「いや、内容的には私も問題はないと思うんですよ。でも放送禁止用語がですね…。私の一存では…。組織の意向がどうなるか…」というようなことを、何度も繰り返している。私もその頃にはだんだん頭が冴えてきて、「内容的に問題ないと貴方が思われるなら、もし万が一抗議があったときに、それに対して適切な返答を用意するのも編集者さんの仕事じゃないんですか？」とつっこんだ。

私としては、「組織の意向が…」とか「私の一存では…」とか「前例がないから…」などという、組織内で働く人たちがよく使うこれらの言葉群こそ、〈言葉狩り〉して欲しいものだと痛切に思った。判断する責任を放棄し、思考を放棄し、人との対話を放棄する決まり文句たち。それを聞かされた者たちの

脱力感と無重力感は、はかりしれないものがある。

人との〈対話〉を放棄しようとしているのだから、これらこそホントウの人権侵害ことばではないだろうか。

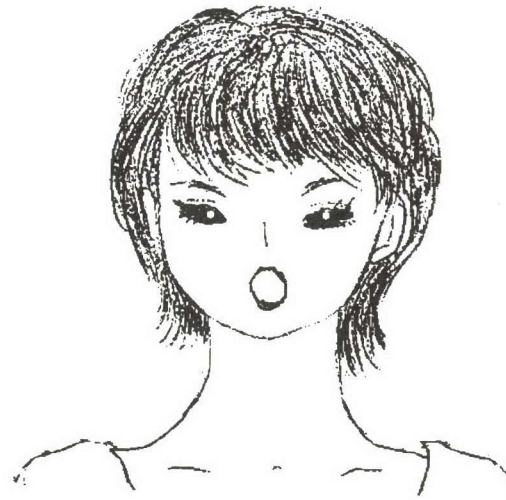
さて、私は、そろそろ双方の意見は出そろったと思ったので、

「『馬鹿』を『バカ』に変更するのなら、了承すること」

「それも不適切と思われるなら、その原稿はボツにするしかない、ということ」

「原稿を書いた当人は、文脈コミで、表現に問題はないと確信していること」を告げて、電話を一応切った。

しばらくして、また電話がかかってきた。ある所に問い合わせしたところ、「内容からして、問題ないのではないか」という、おすみつきをもらったということであった。「だから今回は、とりあえずこのままでいきましょう」ということになった。どのような所に問い合わせしたのか分からないが、とりあえ



ず一件落着となった。よかった。

電話を再度切ってから、そうか、ああも言えばよかった、こうも言えばよかったと、あとからあとから言葉が浮かんできた。

まず「放送禁止用語」という言葉が出てきたとき、「放送禁止用語と〇〇（雑誌名）とは、何の関係があるのですか？」と率直に聞くべきであった。そして、もしそれに対する返答が甘かったら、「多方面から批判が多い放送禁止用語ですが、それを無批判に流用するのが、〇〇のありかたなのでしょうか？」とつっこむべきだった。そして、「文脈や内容をまったく考慮せず、言葉だけを問題にするのは、単なる〈言葉狩り〉であって、言論活動を衰退させるもっとも忌むべき行為なのではないでしょうか」と、自分の思ったところをしっかり言うべきだった。

ふう。ちょっと私、頭に血がのぼっているかしら？　でも、とっても大事なことだと思うのです。

雑誌〇〇の編集者さん。今度「問題」が起こったら、ぜひ真っ正面から〈対話〉したいです。私のいいたいことは、只それだけなんです。

（かのう　かがり）

鳥取大学医学部臨床検査医学講座より

往診日誌

内科医師
小谷　和彦

神の見えざる手

歳の頃は80歳、馴染みのお婆さんが診察室にやってきた。そして、お決まりで、諦めでもあきれでもない微妙なため息をつきながらこう言った。「何でこんなに病気ってあるんだろうね。私のカルテに書いてある病名だけでも高血圧から始まって高脂血症、糖尿病、腰痛、白内障…ざっと数えて10個はある。気晴らしにと思ってご近所を歩くと、隣のAさんは昨日心臓病で入院したっていうし、その隣のBさんは脳の調子が悪くて先週検査を受けて未だ結果待ちだって言うし。ほんと病気って一杯あるね。先生たちは失業せんね」

カルテには記してないけど心配症やおせっかい病もある。

「こんなに沢山病気があるのだから、願わくは、八百屋の買い物みたいに罹れる病気がもう少し自由に選べたらいいのにね」などとこちらもこれまたいつものやり取りをした。お婆さんの問い掛けには、「どの病気が自分の致命症なのだろう。少しは教えてほしいものだ」という含みがある。他にも、「死は怖くない」と逆説的な前置きをしてこちらがぽろりと本音を漏らさないかうかがう手もある。

心配症のお年寄りはこういう間接的な質問を上手に使う技を身につけている。死に方は選べない―それは漠然とは判っている。しかし、もしかしたら、自分の病気の情報を長い付き合いで把握している医者なら死に際を少しでもほのめかしてくれはしまいかと，識ってか識らずか、ついつい掛け合ってしまうのだろう。特に死に至る病が苦痛を伴うのか否か、また家族に面倒を掛ける質なのか否かは気になるところの

ようだ。禁断の果実をかじるというほどのトキメキは到底ないと思うが（？）、見たくないけどちょっとだけは見てみたいという心理も混じっている印象である。

今日のお婆さんはいつになくなかなか帰ろうとしない。何か言ってもらわないと心配症の虫が騒いでおさまらないという雰囲気だ。手のうちをばらすと、実はこちらもこういう時のためにお決まりの準えがある。判で押したようにみんなに話すのだが、余り喋り慣れているようにみられると話に重みがなくなるので、いかにも今考えついたように噛み締めながら話すようにしている。「さっき、どこもかしこも病気だらけって言いましたよね。確かに病気はあちこちに出てくる。でも、親戚、近所の人、芸能人…長い人生経験の中、知っている限りで、小腸の癌を患った人を見たり聞いたりしたことはありますか？」

多くの人の答えは「そう言われれば、心当たりがないような…」である。小腸は消化管全長の実に3／4、粘膜の面積の90％を占めるにもかかわらず、最も癌の発生が少ない臓器とされている。その理由は学問的には種々論じられてきているが、解明されていない。「小腸は胃と大腸の間の奥深くにあることと余りに長いために、現代の医療技術をもってしても検査不可能な場所です。手の届かない部位には病気ができないように人間はできている」のである。

これだけでは狐につままれたという感じを持つ人もいる。そういう人には「では、もう一つ事例を。心臓は誰が動かしていると思いますか？」と問う。多くの場合、みんな考え込んでしまう。「そりゃあ、自律神経が…」と科学的に言いかける人もいれば、単に「ありがたいことですね…」と信心ある発言をする人もいるが，いずれにしても歯切れは良くない。この問題にも今のところ明快な解答は用意されていない。

神の造作。そう、こうした一連の事実にはそういう表現をあてがいたい。胎内での初まりも神の意志なら、死に際も同じである。死の姿は、あなたにも私にもわからない。一介の医者ごときが関

知する領域ではない。まさに「神のみぞ知る。その辺りの医者ごときには解りません」と掛け値なく言うのみである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

余談であるが、「僕はこのことに小さい頃に気付いて感動して医者になろうと思ったくらいですから」なんて私見であることも最後に付け加えている。これは、小腸に癌の少ない現象や心臓は自律性を持っている事実と平行して大切だ。こういう心配症のお婆さんに限って、一か所の医療機関にかかっているだけでは不安で保証のために幾つかの医療機関を掛け持ちしている。そして、医者の口から何気なくでも出た一つ一つの言葉について真偽のほどを知りたがって、掛け持ち先で確かめたりもする。他の医者の前で「神の領域」話をされた日には、僕が診察室で何をやっているのだろうという噂さえ立ちかねない。他人に言わずに、その人なりの答えを見つけてほしいという願いを込めて、くれぐれも私見であることは強調している。

＊＊＊＊＊＊＊

お婆さんは、再び、最初とは少し違う波長のため息をついて、診察室をあとにした。もちろん生老病死は神の手にあることは認識していたけれど、やはりここでも同じ答えかという波長のため息にも思えた。

（こたにかずひこ）

広岡守穂の
常住坐臥 8

エクステンションスクール

最近はどの大学でも社会人対象の教養講座を開いている。昔流にいうと大学版カルチュアセンターであるが、最近はエクステンションスクールといわれるほうが多い。大学によっていろんな名前をつけているが、わが中央大学の場合は中央大学クレセントアカデミーと称している。校風を反映してか、ビジネスマン向けの法律・経済・経営関係の講座が多いのが特徴である。

わたしはここで「文学の楽しい読み方」という講座を担当している。授業は、あらかじめ指定した本を読んできてもらって、感想を話し合い、それから時代背景などを解説するというやり方ですすめている。受講者はわたしと同じ世代か、またはわたしより年上の女性が多い。おなじ本を読んでも一人ひとりの感想が非常に異なっているので、その差異がおもしろく、また教えられることが多い。だからわたしも毎年講座を楽しみにしている。

あるとき幸田露伴の『五重塔』を取り上げたことがある。『五重塔』は明治二四年から二五年にかけて発表された古い物語である。なにしろ井原西鶴ばりの雅俗混淆文で書かれており、だから読むのもけっこう骨が折れる。さてどうかなと思っていたら意外や意外、「たいへん面白かった」「一気に読んだ」などなど、まことに好評で、反応は上乗だった。

こうも反響が良いとは、まったく

予想外だった。実は打ち明けていうと、わたし自身は小説の世界に入るのにけっこう苦労したのである。

あらすじ

物語のあらすじはこうである。感応寺では五重塔を普請することになった。さてこの大事業を請け負うのはだれか。著名な大工の棟梁の川越の源太であった。　ところがここに十兵衛という大工がいた。十兵衛も腕利きの大工であったが、世故たけたところがないために仕事をとることが下手で、いつも貧乏していた。ところが十兵衛は五重塔を手がけたくて手がけたくて仕方がない。彼は世話になっている源太に対抗して、感応寺の朗円上人に自分にさせてほしいと訴えた。十兵衛はミニチュアモデルまでつくってプレゼンテーションするという熱の入れようだった。

源太は十兵衛を仕事に参加させることにした。ところが十兵衛は自分一人でしたいと言って拒絶した。結局十兵衛の熱意の強さにおされて、朗円は思案の末、十兵衛に仕事をさせることにした。しかし十兵衛は大勢の人手を使って仕事ができるかどうか未知数だった。世間の人々は、はたして十兵衛が仕事を仕上げることができるかと、うわさしあった。

十兵衛のつくった五重塔は見事なものだった。落成式の前夜、大嵐がやってきた。寺のものは恐れあわてて十兵衛のところに駆けつけてくるが、十兵衛はびくともするものかとまったく動じなかった。五重塔は小揺るぎもしなかった。とまあ、だいたい以上のようなあらすじである。

物語の視点

さて、小説を読むとき、読者はなんらかの立場にたって読んでいるものである。たいていは、高いところからそれぞれの登場人物の動きを眺めているとか、主人公の立場になっているとか、である。では『五重塔』の場合はどうかというと、主人公は十兵衛だが、物語の視点は十兵衛の中にはない。源太の側から十兵衛に向かっている。というか読者の心は自然に源太に重なりあうように書かれていて、読者は源太の側から十兵衛をとらえるようになっているのである。

どうしてかというと、見事な五重塔を仕上げて後々の世まで名を残す十兵衛であったが、その十兵衛とはどんな男かといえば、これがなんともさえない男なのである。十兵衛は「のっそり」とあだ名されている。動作がゆっくりなのだろうが、それよりなにより人情の機微にうといところが、いかにも「のっそり」なのである。たとえば十兵衛が仕事を受けると決まったとき、源太は自分が受けたときのために準備していた資料を十兵衛に渡そうとする。ところが十兵衛ときたら、ただ「いらない」とにべもなく拒絶してしまう。せっかく源太がはからってくれたのに、その気遣いにありがとうのひとつも言えない。そして源太を怒らせてしまう。まったくもって無礼なのである。もしも十兵衛のような男が近くにいたら、こんな嫌な性格の男とつき合うのはご免だ、と思わせる。というわけで十兵衛に感情移入して読むことは難しい。

川越源太

そんな十兵衛を源太は少し離れたところから見守っている。ならぬ堪忍するが堪忍とばかり、言いたいこともぐっと呑み込み、腹におさめ、和を大切にする。いやただの「和」ではない。五重塔建設という一大事業をなしとげるための和である。

本来なら自分のところに来たはずの仕事であった。それなのに源太は自己一身の名誉にこだわらず、最高の五重塔を建設するためにはどうふるまうべきかということに焦点をすえて行動した。敢えて身を引き、十兵衛に仕事を譲った。それでこそ男というものではないか、と源太は秘かに自負している。源太こそ男の中の男である。この「男」という誇りが源太のささえなのである。ある意味ではまことに良き男ぶりを発揮した川越源太こそ物語の本当の主人公である。

物語は落成式のとき、朗円上人が十兵衛と源太を引き寄せ、ふたりの功績と栄誉をたたえるというところで大団円を迎える。いかにも日本的な、まるで歌舞伎か新派劇のような筋の運びである。

十兵衛という人物の性格設定において芸術至上主義というテーマにギリギリまで接近していながら、スト

ーリーそのものは新派劇よろしく八方丸く収まるというスタイルである。おなじようなストーリーで連想するのが芥川龍之介の「地獄変」であるが、「地獄変」に登場する絵師の良秀は、地獄絵図を描きたいばかりに娘が火炎の中で身悶えているのを眉ひとつ動かさずに写生した男である。それにくらべれば、『五重塔』はずっと世俗的で馴染みやすい。逆に言えば、こんなストーリーではいまどきの読者は満足しないのではないか。そう思われたからこそ、わたしはクラスのメンバーの反応はどうかなと危惧していたのである。

紅露逍鴎

さてこのあたりで、作者の幸田露伴と露伴が登場した時代背景について書いておこう。

幸田露伴が『露団団』ではなばなしく文壇にデビューしたのは明治二二年だった。並び称された尾崎紅葉が『二人比丘尼色懺悔』を書いたのもおなじ明治二二年であった。しかも露伴と紅葉は同年令である。二人にはいろんな縁があり、たとえば二人とも淡島寒月とつき合いがあり、寒月から井原西鶴を紹介されて夢中になって読んだので、文体に西鶴の色濃い影響が認められる。

紅露逍鴎と称された。紅は尾崎紅葉、露が幸田露伴、逍は坪内逍遥、鴎は森鴎外である。いま生年をみると、露伴は慶應三年（１８６７）年生まれである。同じ慶應3年に尾崎紅葉が生まれ、また夏目漱石が生まれている。

これらの人々はそれぞれの仕方で新しい文学を世の中に送り出し、それまで戯作者として低くみられていた文学者に対する社会の評価を高からしめた。露伴は理想美の追求、古典に対する深い造詣を示すことによって、文学に対する社会的の評価を高からしめた。

日本主義への回帰

明治二十年代は、潮目が欧化から国風へと逆流する境目にあった。伝統的なものの再評価があちらこちらでおこってきた時代だった。

それまで政府は条約改正交渉をすすめるため極端な欧化主義の政策をとってきた。いわゆる鹿鳴館時代で

ある。舞踏会がさかんにおこなわれたが、これが大いに人々の眉をひそめさせた。欧米人は男女混淆を好む。それに阿諛追従して舞踏会などを開き、男女の笑いさざめく「醜声」をたてている。そうやっても条約改正はうまくいかないではないか。政府はなにをしているのか。

こういった批判の思潮を代表したのが明治21年に創刊された雑誌「日本人」だった。これは三宅雪嶺、志賀重昂ら政教社の出した雑誌だった。

彼らは国粋主義をとなえ国粋保存を訴えた。国粋主義というといまでは反動という語感があるが、当時の国粋は反動ではない。たとえば三宅雪嶺の『真善美日本人』(明治24年3月)を読むとわかる。雪嶺は中国・インド・ヨーロッパの三者の融合を日本において実現することを考えていた。鹿鳴館に象徴されるような国家による性急な西欧化は偏狭な国家主義に帰着するという批判があった。政府は「外柔内硬」だ、これではいけない。そういう感覚が政教社の人々にはあった。

露伴はまさしくそういう潮目を代表する作家だった。露伴は江戸武士文化と漢籍仏典につうじており、加藤周一が「近代日本における伝統的教養の持続性の証人」と呼んだように、露伴といえば東洋的な教養を代表する作家と目されている。のちに京都帝国大学の講師として一年間京都にあったとき、露伴が英語を読んでいるのをみて同僚はびっくりしたというエピソードがある。

プロジェクトXの世界

源太が十兵衛にゆずり、朗円上人が十兵衛に普請をゆだねるなりゆきは、直接的には日本的な義理人情の世界である。しかしよく考えてみると、そこから透けてみえる構図がある。

『五重塔』の世界は、自己中心的だけれども才能のあるエリートの育成をめざした明治の政治の姿を、そしてそれに民衆が忍従することを促した近代日本の構造に、そのまま直ちにではないにせよ、どこかでかさなる。才能はあるが、世間知に乏しく自己中心的なエリートたち。そして彼らを盛り立てる庶民。前者が十兵衛に、後者が源太に、それぞれ重なる。十兵衛はわがままだけど頭だ

けは良い学歴エリートにダブり、源太はグラストップの「庶民にして忠良なる臣民」を想起させる。

こうしてみると『五重塔』は、一見芸術至上主義に近いようにみえながら、実は近代日本の「構造」を描き出している、そしてその「構造」が読者のこころをとらえた、とはいえないか。

朗円は事業を重んじた。源太と十兵衛をはかりにかけて、より立派な仕事ができるのは、源太でなく十兵衛だと見抜いた。いやこうかもしれない。源太に仕事を委ねても十兵衛は協力などしないだろう。十兵衛はしょせんそういう男である。一方十兵衛に仕事をさせたらどうか。源太の人柄からして彼は協力せずにはいられないだろう。そうすれば塔を建てるのは一人ではない。二人である。そのほうが心強い。朗円はそう読んだとも解釈できる。

源太もまた、十兵衛の力量の並々ならぬものがあることを感じていた。なにより十兵衛には五重塔のミニチュアをつくって示すというプレゼンテーションをしてまでこの仕事を手がけたいという意欲があった。というわけで源太は十兵衛に栄誉ある仕事を譲った。

この筋道のなかで何が最優先されたのかといえば、それは事業をなすこと、であった。源太はかれがつちかった政治力でもって周囲の不平不満をおさえこむ。ばかりかその政治力こそが、彼自身の不満をぐっとおさえこむのに力を尽くしたのである。名を惜しむがゆえ、源太は十兵衛に仕事を譲った。そして自らは後衛に回り、十兵衛が思うさま力を振るえるようにお膳立てをととのえた。

ＮＨＫの「プロジェクトＸ」の世界である。

次のようにもいえようか。この時期の幸田露伴は昭和の高度成長期における司馬遼太郎の役割をはたした。その時代のリーダーが獲得するべき発想、態度、向上心の型をしめし、しかもよくグラストップとの架け橋たるべきことをしめした。司馬遼太郎は世界と東洋と日本の文明史的な視界の中で日本のリーダーのありかたを提示したが、幸田露伴は東洋と日本の文化史の中でリーダーのあり方を造型しようとした。そういうことだったのではないか。

（ひろおか　もりほ）

地方政治を考える

女性の人権と男女共同参画

広岡 立美

人権擁護委員の研修会で講師として話しました

２００２年２月、人権擁護委員の研修会で講師として話しをさせていただきました。どうしてわたしが？と思われる方もいらっしゃるのではないでしょうか。わたし自身お話しをいただいたときは吃驚したくらいですから、訝しく思われても当然です。

実は女性の人権擁護の課題について、ＤＶを中心に話しました。わたしは仲間とともに石川県ではじめてＤＶ被害女性のための民間シェルターをたちあげたので、その実績を評価されて講師に呼ばれたのだと思います。

いま人権擁護委員は全国で「女性に対する暴力」についての研修をおこなっています。それには男女共同参画社会基本法にからむいきさつがあります。

１９９９年に男女共同参画社会基本法ができました。基本法というのはその課題について国の取り組みの大枠を定めたものです。男女共同参画社会基本法は第17条に「苦情の処理等」という条文があります。これは(1)社会の中における女性の人権侵害をなくすことに取り組むということと、(2)国の施策に男女平等に反するものがあるばあい国は苦情や異議を受けつける、ということの2点について定めた条文で、基本法の中でも非常に重要な部分です。ただし基本法では具体的な定めを置いていません。取り組まなければいけない、苦情や異議を申し立てることができるようにしなければならない、と書いてあるだけです。

そこで政府はなんらかの仕組みをつくらなければならないわけですが、(1)社会の中における女性の人権侵害については人権擁護委員

が、そして(2)国の施策についての苦情については行政相談員が受け皿になることになっていて、それぞれの委員の研修もはじまっています。わたしが講師になった研修は、実はこれに当たるわけです。ただし全体のシステムをどうするかは、まだ男女共同参画推進会議に専門調査会を置いて検討中です。

「苦情処理」の大切さ

女性に対する暴力あるいは女性に対する差別は社会の至るところにあります。家庭におけるDV、会社におけるセクハラなどなど、さらにはレイプやストーカーといった犯罪もあります。DVをみても、数年前におこなわれた旧総理府の調査によれば、「(夫や恋人から)いままでに1回でも死ぬかもしれないと思うような暴力を受けたことがある」と回答した女性は4・6%にもなります。

これはたいへんな数字です。いかにたいへんかは人口10万人の都市で何人の女性がそういう経験をしているかを計算してみるとわかります。10万人の約8割が成人として、女性はそのうちの半分ですから成人女性は約4万人になります。その4・6%は、なんと1800人です。

この数字をみてもわかるように女性に対する人権侵害は無数にあります。こういう人権侵害を少しでもなくすことが、男女共同参画社会づくりの重要な課題ということになります。男女共同参画基本法の第17条は、そのことを受けた条文なのです。

さて男女共同参画をすすめるには、人権を侵害された女性の訴えを聞く受け皿がなければなりません。それも全国どんな地域にもなければならないし、できるだけたくさんあるほうがいい。というわけで国は人権擁護委員を受け皿にしようと考えているわけです。人権擁護委員は全国に15,000人もいますから、その意味ではたしかに適任です。

人権擁護委員の責任は重大

こうなると人権擁護委員の責任は重大です。しかし問題もあります。

人権擁護委員を受け皿にする構想に対しては、もともと女性問題に取り組んでいる人たちからかなり強い反対があったのです。どん

な人が人権擁護委員になっているか、ちゃんとしたジェンダーの視点を持っている人がどれだけいるか、これまで女性問題に関する相談を受けてきたか、そしてそういう相談に適切に対応してきたか。こういうことを考えると、人権擁護委員がきちんとした受け皿になることを期待するのは無理ではないかという意見が強かったのです。前述の政府の専門調査会の委員の間でも懸念する意見が相当に強いという状況です。

たしかに人権擁護委員といえば社会的に名声を獲得した地元の名士で、比較的高齢の方が多く、3分の2は男性です。DVや離婚の相談などが持ち込まれると、偏見の強い対応をする委員も少なくないと、かねてからいわれてきました。

こういった事情を考えるにつけても、人権擁護委員はぜひともきちんとした研修を受けていただきたいと思います。

DVや子育てや女性の自立については視点の転換がすすんでいます。たとえばDVでいえば、これまでは加害男性のケアを重視していましたが、DV防止法は被害女性の救援を最優先するという考え方に則っています。年齢が高くなるほど、こういう視点の転換についていくのが困難になる傾向があります。視点の転換をしっかり把握してもらいたいものです。

なお近い将来、人権擁護委員の制度そのものが変わる見通しです。委員の選び方も変わるでしょう。そうなったら、ぜひジェンダーの視点をもつ人物が任命されるようになってほしいと考えています。

悩んでいる女性が相談に行くところはどこか？

基本法は「苦情処理等」ということばを使っていますが、法律の観点をおいて別のことばで言えば「相談」です。実際には「苦情処理」というより「相談」というほうがずっとわかりやすいでしょう。

これまでも女性はさまざまな人権侵害や差別を受けてきました。そして被害を受けた女性は、弁護士に相談したり、女性センターに相談したり、労働省の地方事務所に相談したり、裁判所に訴えたりしてきました。基本法はもちろんこういう制度を否定するものではなく、こういう既存の制度に併存するかたちで国として

受け皿を整備しなければならないと規定しただけです。

男女共同参画社会をめざさなければならない。そのためには人権侵害された被害女性の訴えを受け止める受け皿が社会の隅々までいきわたっていなければならない。それによって少しずつ男女共同参画はすすむ。それは良いでしょう。

大切なのはそういう被害女性の訴えをきちんとすくい上げるには何が大切かということです。男女共同参画社会をつくるという視点に立っていえば、「わたしは女性であるがゆえにこんなにひどい目にあっている」と思っている人が、自分の直面している問題についてどこに相談に行くだろうかということです。苦情処理の受け皿としていちばんふさわしいのは、そういう女性がここならばと思って相談にやってくる施設や制度です。そして肝心かなめのことは、そういう施設や制度をつくることです。

「わたしは女性であるがゆえにこんなにひどい目にあっている」と思っている人はだれに相談するでしょうか。DV被害女性は、民間シェルターや行政の婦人相談所や警察に駆け込んでいます。離婚などの家族の問題だと法律相談や女性センターなどに行きます。会社のセクハラの場合は弁護士に相談したり厚生労働省の地方事務所に行くでしょう。人権擁護委員に相談に行く女性は少ないのではないでしょうか。

かなめになるのは地方の女性センターでは？

さて「わたしは女性であるがゆえにこんなにひどい目にあっている」と思っている女性が相談に来たときに、しっかりしたジェンダーの視点でいちばんきちんと対応できる施設はどこでしょうか。

いちばんしっかりしているのは、やはり大都市部の女性センターです。たとえば横浜女性フォーラムや大阪府のドーンセンターが有名です。これらの女性センターでは非常にしっかりした女性総合相談の体制が整っており、対応事例もノウハウもたくさん蓄積しています。

これらの女性センターの女性総合相談では、DVや離婚ばかりでなく、性、身体、子育て、家族の問題、職場の問題、再就職など、女性のあらゆる相談を受けつけています。ストレートに法

律問題に直結する問題より、家族や性の問題が多く、きちんとしたカウンセリングの技術が求められるケースが大きな割合を占めています。相談にのってもらっているうちに、これはやはり男女共同参画の問題だと、相談者自身が気づくこともあるでしょう。DVやセクハラの相談の場合には、相談者が法律的な手続きを望んでいるかもしれません。この場合は基本法にいう「苦情処理」のプロセスと実質的に同じプロセスだということができます。

こうみてくると「相談」は「苦情処理」の裾野をなす分野であり、「相談」のなかから「苦情処理」のルートに乗せるべきものを仕分けることが大事だということがわかります。つまり地域における女性総合相談の機能を充実させることこそ、実は「苦情処理」のしくみをつくる際にもっとも重要なのです。

わたしは女性センターや公民館など、女性が気軽に立ち寄れる施設に、女性総合相談の窓口をもうけることが非常に重要だと考えています。ゆくゆくは、そういう窓口が全国に5000カ所ほど必要なのではないでしょうか。そうなると、いまはまず手始めに県や市の女性センターに女性総合相談の窓口を設置し、ジェンダーの視点から相談に乗ることのできる専門的な相談スタッフを置くことが重要になります。

相談員の待遇も低すぎます。相談員の多くが、責任は重く身分は軽くという状況に置かれています。これではすぐれた相談員を養成できません。個々の相談事例を点検しながら相談技術の向上をはかるスーパービジョンなど、課題は山ほどあります。

それからもう一つ、こうした女性相談のキャリアをつんだ人が人権擁護委員に任命されるようになるべきだと考えています。

このように考えてくると、基本法には国が苦情処理を受け止めるシステムをつくると書いてあるものの、そのためにこそ地方自治体がしっかりした女性総合相談の体制をつくらなければならないということになります。相談員の養成、技能向上、待遇改善、そして相談窓口の設置などなど、自治体に与えられた課題は少なくないのではないでしょうか。

（ひろおか たつみ）

立川市女性総合センター・アイムの取組み

『出前講座』やってみませんか

川崎　毅

女性センターでおこなわれる講座、男女共同参画フェスタ。「夫に聞かせたかった」という声をよく聞く。せっかくいい話しを聞いたのに、女性でなくて男性こそ聞くべきだ。

どうしたら男性に届けることができるか。これは女性センターの職員の共通の悩みである。

お説教されるとわかっていて、わざわざ女性センターまで足を運ぶ男性はいないだろう。ではどうすればいいか。

そこで考えられるのが、出前講座である。葛飾区女性センターでは保育園に出前講座を開いている。土曜日に子どもを送ってきた両親に、そのまま帰るのではなく、1時間半ばかり講座を聞いてもらうのだ。すると、成功する。

大切なのは出前講座のテーマです

とはいえ男女共同参画そのものだとなかなか協力してもらえない。企業に協力を依頼しても「うちは男女平等ですから」という答えが返ってくる。理解してもらえない。それが現状である。そこでテーマを工夫することが必要だ。教育、子育て、セクハラなどに。

ＮＰＯサポートセンターが各地で、できている。ＮＰＯセンターの場合、出前講座の依頼がどんどん舞い込んでくる。社会貢献をめざす企業も少なくないし、青年会議所なども関心が高い。ところが男女共同参画となるとそうはいかないのである。企業は男女平等だと考えている。専業主婦だけど、財布をあずけている。そういう夫婦関係のどこが不平等かと真剣に

考えている。リプロダクティブ・ヘルス＆ライツに至っては、第三世界の問題と誤解されていたりする。自分から避妊を言い出せない少女たちがどんなに多いか。性と身体についての自己決定権のことなのに。

立川市総合女性センター・アイム

桜の花やつぼみをちらほらと見かけるようになった昨年の3月23日、ＪＲ立川駅北口から徒歩約5分にある立川市総合女性センター・アイムにお話を伺いに行った。12階建てビルの5階にあり、床は一面フラットになっていて、バリアフリーに配慮されている。子どもの声や笑い声が聞こえてくるのは、保育室が無料開放されているからだ。ロビーには資料が置かれていたり、また女性問題に関するポスターなどが展示されている。文字で説明するのではなく、図で説明するポスターなので「女性問題ってこういうことなんだぁ」ということが想像しやすい。

１９９９年男女雇用機会均等法が改正され、性による差別が禁止された。また同年、男女共同参画社会基本法が成立し、国内で徐々に徐々に女性の人権が制度的に保護されるようになってきた。とはいうものの、習慣や文化そしてそれらに影響されてしまう意識はなかなか変化しない。女性問題に対する意識は一部では根付きつつあるけれども、長年の蓄積というものはそう簡単に拭えない。

男性・女性に関する意識を少しずつ変えていきませんか？

そこで、男性・女性に関する意識を少しずつ変えていきませんか？という取り組みが生まれてくる。その中でも取り分けておもしろい取り組みがある。それが『出前講座』だ。

今回お話を伺ったのは、センター長の有泉清美さんと越川道子さん。お二人に、アイムが行っている『出前講座』について説明してもらった。と、その前に少しアイムとはどんなところなのかを押さえてみたい。

立川市女性総合センター・アイムは平成6年10月に開館。男女共生社会を推進し、女性問題の解決をめざして女性も男性も豊かに生き生きと暮らせる社会をつくるための活動拠点として設置された。消費生活センター機能と生涯学習情報コーナーが併設されている。この目的のもと、計画推進、意識啓発、女性の支援、市民参画支援

などの事業を展開している。アイムというのはセンターの愛称で「I'm glad to see you」から取ったもの。人と人との出会いと交流を大切にしようとの意味が込められている。

『出前講座』のおもしろさ

さて『出前講座』。これは意識啓発事業の一環として行われている。平成9年から始められ、年2、3回出前して講座を開いている。ここで『出前』という言葉に注目。なぜ出前なのか。

例えば、アイムが女性問題に関する講座を開いたとする。広報やチラシを出してぜひ来てくださいねと宣伝する。そうすると女性問題に関心のある人、興味のある人、問題意識のある人が講座を聞きに来る。一見何の問題もないように感じるが、ここにちょっとした問題がある。というのは、女性問題なんてどこ吹く風ぞという人や知らない人にはこの状態だと一向に広まらないのだ。

また女性問題のような少し硬めの講座だと、もともとなかなか人が集まらないという実情もある。そこで、関心があろうとなかろうと、より多くの人々にこの問題を知ってもらえる方法はないだろうかと発案されたのが『出前講座』だった。発案者は、立川市男女共生社会推進計画に関する諮問機関の男女共生社会推進会議の推進委員だ。この会議は学識者5人、市民団体推薦と公募の10人、計15人の委員で構成されている。

次に気になるのが、誰にどのように講座を出前するのだろうかということだ。出前先は立川市内の自治会、学校、PTA、団体、会

新刊案内

よくわかる自治体の男女共同参画政策

施策のポイントと課題

広岡守穂・広岡立美共著

学陽書房

定価　本体2100円+税

体裁　四六版上製240ページ

自治体は男女共同参画の最線。最新情報を網羅。各地で繰り広げられている取り組みを数多く収録しました。現場の担当者はもちろんのこと、市民の勉強会や講座に最適です。

社などだ。どのように出前するかというと、上記団体が総会や研修を開催する時に、始めか終わりの1時間から2時間程度を拝借して講座を開かせてもらっているのだ。越川さんは「女性問題という目的だけだと人が来ない。だから、総会や研修などの集まりがあるときに併せて行っているんです。」とおっしゃる。なるほど、この方法だといろいろな人々に話を聞いてもらえそうだ。

先に平成9年度から始められたと書いたが、当初から平成11年度まで推進委員が委員の関係団体と出前講座のパイプ役を買って出てくれたそうだ。言い換えると、委員が最初パイプ役を担ってくれたからこそ出前講座が軌道に乗ったともいえる。と、こう思うのは「あの人(委員)が招いたんだから話を聞いてみよう」と関係者が思わない限り、硬め?で認知度が低いジェンダーや女性問題の講座を総会で聞いてみようなんてことにならないと感じるからだ。総会の中で講座が開かれる時間というのは、例年だったら余興に当てられる時間ということもあるらしい。このようなことを聞くとなおさらそう思う。平成12年度からは、越川さんが企業や団体に出前講座を開いてみませんかと持ちかけて講座が出前されるようになった。

講師選びも成功の秘訣

出前講座の内容は越川さんとパイプ役、講師の3者で対象者がどのような方々か考えて決める。あまり難しい専門的なことではなく、参加者が女性問題に対してきっかけを持てるような分かりやすいものを組んでいるという。そうでないと出前講座の性格上、講座の途中で帰られてしまう人が出てきてしまうかもしれないし、はたまた良かれと思って開催されたものが反発だけを買ってしまう結果になってしまうかもしれないからだ。だから内容づくりに越川さんはとても力を注ぎ込んでいる。有泉さんは「切り口が男女共同参画であれば良い」と考えているようだ。

そしてもうひとつ内容づくりと同様に注意を払っているものがある。それは講師選びだ。男性が出前講座の対象者の場合、男性講師の方が話を聞き入ってもらえるということが、経験から分かってきたそうだ。どうやら女性講師だと反発のほうが大きくなってしまうようだ。女性の場合は、このような傾向はあまりないらしいのだが。このようなところにも、日本の男女観が顔を覗かせているの

がおもしろい。また越川さんは「女性問題などを語れる男性講師が女性講師に比べると圧倒的に少ない。（講師になれるように）頑張ってください。」と微笑んでいう。自分の知識のなさを考えると、ちと耳に痛い話だが、知識を広めようとする側にも問題があるという指摘は鋭いと思った。

出前講座を受けた方々のアンケートを見ると、眼からウロコが落ちたというような感想が結構多い。知らなかったから、興味も関心もなかったという人がたくさんいるということを表していると思う。また、出前講座の好評さを物語っているようにも感じられる。というのは、男性が対象のときのアンケートにウロコ系の感想が多いからだ。

出前講座参加者は男性より女性の方が多い。越川さんは「まず女性に力をつけて欲しいし、意識して欲しい。」と熱く言う。社会的不平等の憂き目に遭ってきたのは女性だからという思いが根底にあるからだと思う。

今回お話を伺って改めて思うのは、男性より女性の方が意識の上で先に行っているということだ。けれども、女性問題やジェンダーは男女を問わない問題だ。出前講座のアンケートを見ていると、この問題に対して男女問わずほとんどの人が打てば響いている。ということは、それぐらい身近な問題でありながら意識にのぼりにくい問題だということだろう。女男に少なからず意識の差はあるにせよ、それぞれに問題意識の芽が育ちつつあるように思う。

（かわさきつよし）

＊かぎっ子は国によっては犯罪になる

アメリカ、欧米では子供が一人で家にいることはありません。また、車内に子供が置き去りにされることもありません。これは犯罪にあたるそうです。時々、アメリカのニュースで、お母さんがちょっとスーパーに買い物に行っている間、子供が置き去りにされたと放映されます。とかく事件の犯人になるのが、日本人の親であるケースが多いそうです。海外に出かけられたときは、もちろん日本でも子供を車内に置いてパチンコに興ずるというのは論外ですが、注意しましょう。また、学校から帰ってきて親がいないときは、近所で世話をするのが習慣のようです。ご近所付き合いも大切だということですね。

百人一首

平和町児童館の毎日

大野木潤子

今日はボランティアのおばちゃんが、児童館の子どもたちにお話の読み聞かせに来てくださる日である。毎月一度、子どもたちの心を育てるすてきなお話を読んでみえられる。12月はきっとクリスマスのお話が盛り込まれているだろう。それとも、お正月さんが選ばれたかな…とこちらまで胸がはずむ。

「さあみんなお話の部屋へ入ってー」と遊戯室や庭で遊んでいる子たちに声かけて回る。こまやけん玉で、大縄とびで、ジャンボマットで遊んでいた子たちが集まってきた。鬼ごっこで外を走り廻っていた子たちも室内に入ってきた。

その中のひとりが、

「あんなもんつまらん。せっかくみんなで遊んどったんに、やめて来んならんことあるかい。絶対にぼくはいややからな」と声をあげた。一緒にいた一年坊主たち8人、頭を並べて

「そうやそうや、ぼくも入らん」

「わしもや」

「……」と口を揃える。先月までひざ小僧を揃えてお話に聞き入っていた子たちの反乱である。

女の子たちや他の遊びグループは神妙にお話の部屋へ入って行った。

「折角来てくださったんだよ。楽しいよ」となだめにかかるが、

「クリスマスの話？もうなんべーんも聞いて知っとる。昨年も聞いたよ」

「保育園で聞いたことある。知っとる」と一年坊主たちも声を揃える。こちらがとうとう折れて、

「それじゃあ、しょうがない。今日は迷惑をかけないよう好きにしていいよ」と声をかけておいた。

すぐもとの遊びに飛び出すものと思っていた。お話会の隣の部屋から出て来ない。少しは「悪いな」と気がとがめているのか、それとも引っこみがつかないのかと、そのひたむきさに可愛さを憶えていた。

でも妙に静かだ。声ひとつ出していない。気になってそーっとのぞいてみた。

なんとーなんと、テーブルの周りによって8人全員が百人一首の読み札を一枚づつ手に持って眺めている。ブツブツと声にならない口を動かしながら。驚いた。

4年生の遊びのリーダーの指図どおり「お前ら、ここで百人一首を一緒に覚えよう。声出さんと覚えるんや。もうじき大会があるんやから、自分の得意札を一枚作れ。それを覚えるんや」と。

国語の本読みもたどたどしい一年生も混じっていたのに、たぶん、手にさわった札なんだろう、旧仮名づかいの文字の入った小さな読み札を何がわかるだろうか。真剣な眼差しにきゅーんと胸を打たれた。この子たちにとって造反のひとときだったかも知れないが、今まで知らなかった世界をのぞくきっかけになったことは確かだ。身じろぎひとつせず、リーダーの真似をして、よみ札をじーっと眺めて30分が過ぎた。

お話会が終わり、ボランティアのおばちゃんは帰って行かれた。集まっていた子も散って行った。

そーっと部屋に入り「憶えられた?」と一年坊主に聞いてみた。「わからん。知らん字、いっぱいある」のに30分。読み取れる字だけを何度も眺めていたのだろうか。

「なかなかしよをひとりかもねむ」

「ころもほすてふあまのかくやま」…

翌日からこの子たちに応援して百人一首をオールひらがなで一首づつ紙に書いて憶える手伝いを始めた。八百年以上も前の恋のうたを「ひとしれずこそ　おもいそめしが」

「やくやもしおの みもこがれつつ」

懸命に、けんめいに憶

えている。

1ヵ月後、土曜日に小学校の体育館を借りて地域の児童クラブが集まって百人一首大会が開かれた。

腕を上げてきた子たちに「決して油断するな。相手は強いよ。井の中の蛙になるなよ」と釘を差して送り出した。大分ビビッタらしいが、「61対39。勝ったよー」と帰って来た。百人一首の世界を完全に自分のものにして。

（おおのぎじゅんこ・石川県母親クラブ連絡協議会会長）

ゆらゆらと 心に残る

堀川 美紀子

夏に訪れた長田公民館で、素敵な絵との出会いがありました。絵と言っても立体的で、トールペイントのようでもあり、その作品はヨーロッパの町並みの一部を切ってはりつけてあるようで、地味ではあるけれど目の前に広がるようでした。

静岡市のアイセル21で行われるアンデルセン賞作品の展示会場に飾りたいと申し出たところ、快いお返事をいただき、アトリエを訪ねることができました。

玄関をあけると、1本の樹があり、その中には小さな家が置かれ、妖精が飛び出して来るかのようでした。作品の優しさから、藤野日出男さんというアーティストがどんな人であるのか想像がついていましたが、出迎えて下さった笑顔は、親しげで優しく今でも目に浮かぶようです。

公民館でみた絵の他に、お茶の木のランプ、ワイヤーで作られた時計、小さな家にはランプがつき、のぞくと「Merry Christmas」の文字が見えました。海岸の砂で作った大きな砂絵もありました。少し傾いているテーブルとイス。本を読むイス、バイオリンを弾くイス、ゴルフをするいすなど、作品のどれも

が生きているようで手で触れてみたい衝動にかられるのが不思議でした。

一緒にいた8才の娘は迷いもなく手で触り始めました。「やめなさい」と慌てて止めると、「いいんです。子どもは触って確かめているのですから。そうやって楽しむのですよ」。そう言って、子どもの感性を楽しんで優しく見つめる藤野さんがいました。「おもしろいですね、子どもって。この子を見ていて次の作品のイメージがわきました」。大切な芸術作品を壊してはいけないと冷や汗をかいたのに、その言葉にホッと安心すると同時に、藤野さんのような自由な発想で心のままに表現するアーティストに、子どもも私も出会うことができて嬉しくなりました。

その後、イメージした作品は仕上がったのでしょうか。

お礼のために出した年賀状のお返事は奥様からの葉書でした。「暮れに亡くなりました」との文字は信じられないほど簡単で、ご家族の悲しみが伝わってきました。

思えばあまりにも優しくはかなげで、でも夢を語る瞳はキラキラと輝き、信じていれば夢は叶えられるということを教えていただいた気がします。自然に流れる川でオルゴールを作りたいと言っていた夢もいつか必ず叶えられるでしょう。新しく開発したという水版画のひとつひとつも目に焼き付いています。楽しそうに音楽を奏で、おしゃべりや笑い声がきこえてきそうな絵。私の心にゆらゆらと残っています。

藤野さんの作品は、目の見えない人には触れることで、耳の聞こえない人には語りかけるような優しさにあふれています。ユニバーサルな空間で癒される人も多いことでしょう。

今年開催予定の個展は開かれるのでしょうか。親しくさせていただいたと言うのは失礼かもしれませんが、出会えたことに感謝しています。日がたつにつれ悲しみが増していくのでしょうけど、子どもの感性を優しく見つめていたあのまなざしを忘れずに、子育てしていきたいと思います。

（ほりかわ みきこ）

素敵は無敵

絹谷 智帆

素敵は無敵である

ならばどんどんオシャレして、エステにいって、ヴィトンとグッチを…ってなことでは全然ない。

素敵さはその人らしさだ。

行政の女性政策に携わって私が感じたことはこのフレーズだった。その人がその人らしくいられない環境が残念ながらどうも世の中には存在してしまっている。女性に限った話ではない。男性もそう。輝ける素養が充分あるのに、時に何かにおびえ自ら色あせている者をみると、仕事を忘れ気の毒に思ってしまうことがある。心理学によると一番解っていそうで解っていないのが自分という対象だそうだ。私もそのとおりだなぁと思う。またこうも思う。人は比較するに適さない存在なのだとも。

「私らしさ」

解っているようで意外や意外、ムズカシイ。場合によっては「考えたこともないワ」ってな人もいるのだと思う。無理もない。幼いころから「あなたって子は！○○ちゃんはちゃんとできるのに！困った子ね！」などと他者との比較から己を認識させられることが多いんだもの。インサイドの自分に着目することに慣れてないことだってありうるよね。けど、このことに慣れると段々素敵になってくるんじゃないかな。自分らしさが解ってくるって言うより、自分らしさを感じてくるっていうカンジ。私ってこんな側面もあるんだなぁって。自分自身をよく掴んでいる人ってムリがなくて、僕は心地よくいられる。お互いニュートラルでいられるから。

話を戻す。自分自身のインサイドを感じられるようにちっちゃなことから試してみるといい。だ

んだん無敵的になるから。

が、しかし　これだけでは無敵的のままなんです。「的」をへらすためにはもうひとつあると思います。それはその感じたことを他者にそのままありのまま(脚色せずに)怖がらず表現してみること。人は比較するに適さない存在だけど、やっぱり自分自身が一番解りづらい。だから自分自身を映し出だす鏡がどうしても必要でしょ。アウトサイドの自分もやっぱり感じたいよね。共感が得られれば安心だもの。

「無敵」つまり強いこと

強さってみんなはどう思うのかな。僕は最近この「強さ」の捕らえ方が少し変わってきてるんです。色々なことがあって認識具合が変わりました。以前はイメージ的にはガンジョウで硬くて逞しいみたいなもの。だけどこのイメージだと疲れちゃうし、脆さをともなってしまうでしょ(自分の脆さに気がついたのね。たぶん)。しなやかで、したたかでみたいなイメージがプラスされてニュートラルに近いもの。それが最近の僕の強さのイメージ。「負けない」って意識した時点で、もう負けちゃってるじゃないかなって。そんなこんなでつまるところ、僕の「強さ」とは立ち向かうのではなくて(時に必要だが)、そのままを受け入れられるかどうかっていうこと。いかがでしょうか。

気がつくとなんだかとりとめもないことをツラツラと書いてしまった。実はもう少し格式ある原稿ができてはいるが、今の自分にマッチしていないのです。自分らしい表現でこの『家族とくらし』にと思ったので、こんなカンジにしています。(と言うより自然にこうなってしまった)

男らしくとか、公務員らしくとかね、変に疲れることは背負いたくない。僕は僕らしく語るように表現をしていきたいの。たぶん人生は己の確認作業なのだと思う。この『家族とくらし』が掲げる自分育て(エンパワーメント)ともシンクロするのだろうとも思います。この雑誌の読者の中にも自分を充実させたいと願う方は多いのではないで

しょうか。私はそう願っています。

あなたを育てることはあなたの隣人を同時に育てることになるのだと思います。その逆もしかりですよ。あなたにはあなたに適したフリースタイルが必ずあるのです。素敵は無敵です。どうか自分のインサイドを感じられるように、そして隣人に映るアウトサイドのあなたを素直に受け入れられるように。それが私たちのエンパワーメントの源流なのですから。またどこかでお会いしましょう。（きぬたにちほ）

〈編集後記〉

◇男女共同推進条例をつくった県庁で、女性職員のお茶汲みが続いている。総務部長は臨時職員がやっているのだからワークシェアリングだという。ならば男性の臨時職員にもお茶汲みをさせるべき。みなさんはどうおもわれますか？（た）

◇夫婦で本を書きました。『よくわかる自治体の男女共同参画政策』（学陽書房、２００１年11月）といいます。久々に楽しい仕事でした。基本法ができて自治体は男女共同参画に取り組まなければならなくなりました。女性のエンパワーメント、男性の意識改革、子育て支援、企業への働きかけ、ＤＶ防止の対策など、課題は山ほどあります。しかし実際には、何をどうすればいいかと悩んでいる自治体担当者が少なくないようです。硬い本ですが売れているらしく、うれしいかぎりです。（も）

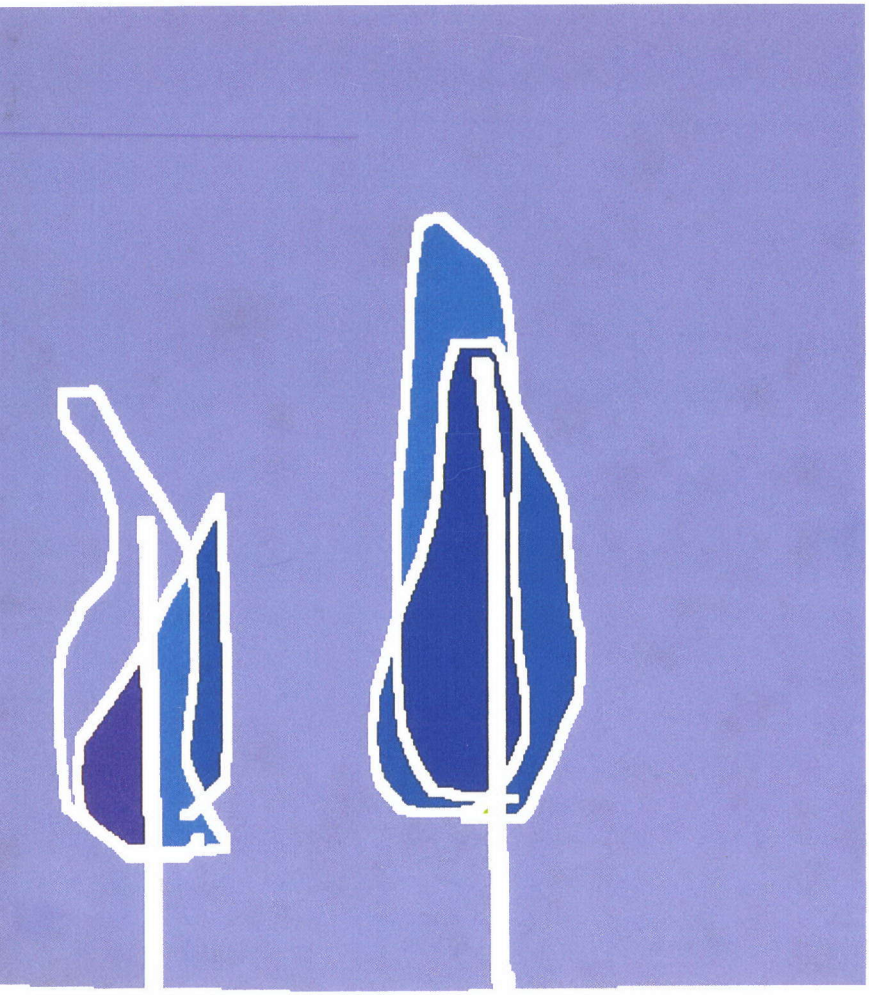
◇知り合いのお医者さまが95歳になる母親に毎月手紙の定期便を送っています。あるとき珍しく母親から返事の手紙が来ました。あわてて開いてみると「住所が書いてあったから届いたけれど、こんどからちゃんと宛名を書きなさい。郵便やさんに迷惑がかかりますよ」とありました。そして、最後に「あなたももうろくしたねえ」と結んであったそうです。（た）

◇卒業生の結婚式に出席しました。二人はわたしのゼミの同級生です。つきあっているとは、露ほども知りませんでした。まあ、いろいろあって…、聞けば聞くほど純愛を貫いた二人です。応援してやりたいと思っています。（も）

◇やっと17号が出ました。大幅に遅れてすみません。エー、それですぐこの後に、18号が続いて出る予定です。

連絡先
〒920-0972
石川県金沢市杉浦町１の１
家族とくらしの会
代表　広岡立美
☎076-231-5175
FAX 076-231-5175

女性の自分育てを応援する雑誌



家族とくらし　17号
２００２年２月２８日発行
発行所　家族とくらしの会
発行人　広　岡　立　美
〒920-0972 石川県金沢市杉浦町1-1

600円

表紙・広岡伸子
マーク・けらえいこ　題字・弓削明子
カット・広岡史子　小谷恵子　かのうかがり